貞享式海印録

発句脇法

三物表物

一

へ 5
1117
1

投一碗茶

自序

夫道を修する者は必ず学んで出世間法を求めるのみにあらず俗門の中に居て出世の法を求めるも亦可なり況んや出世の法は一法界大悟の法門なり唯依当会の有差の若干あるを唯一真如故に言海印三昧也と云えり人を汲て渇を癒し衆徒の古臭を拂ひ更めて法を説く者衆の道を記す徒る義法制度あるべしてんの

傳は南くみ以られと雖もあ免ぢち乃
ちとかりは連ちあ〻ち者く生めの月を
祭りて宮〻く海印の義を祈られあり
飛樣羅をとかう為く条こ弱あてちきを
二三子は伝めの宮と支あ子一理乃由の
確論あれも之を伸る付き能押手
ひ〻り社の月は宮乃辺より風こあひ
くやこ為こ交る雪れる秋の木仲社裏こ
裏の矣乃宮あり四時の朝旅山形社
奇飢神報あれも毎年毎あり人宿
一を乃正樂衣食宮財日用の以幸文
宮て宮き彼の服こ為ちこ云の祭乃乃
りみを也演の真祈い子ひ祈社

海こをあ〻ち秘い法方るちきをん〻ホ
拾宮て象象くの縁とつるを祭
あもてはれ祈を挑市宴こ矢事式
海印録と号く人ち〻安要宮係乃
訳をあて蒼義の海印中ホんを
隆あ彼て宮宮為の彼風事〻
ちきいう也に逆のわる祖時のかる美の
乃列年社の帝ても移こる開社
花もちらあれいと正風後古の預を
新て同海こ於ちくやと西方の風士茂
いをあこちの内南教の猶人
あ反云来弥生　也高

○目録

一ノ巻 発句 発句柄 句 三音 三物 表物
二ノ巻 表不苦句 四句ノ 裡移 白老拳句 奉納
爰起 匠語 人位ト唱ル弁 支仆 病 述懐
山乳 水辺 教場 居仏
三ノ巻 意振 名仏 神尺 毋弟 降臨 風乾坤
附分 択分 附言 四季 雅
四ノ巻 月 天秋 日星 花 植物 生乳
五ノ巻 埃字 ゐ字 字去 崖字 てゝて 仆云 用言
六ノ巻 数字 医字 飲食 衣乳 彩字 色五 気物
出体 大体 五行 一字 長 准付 軍事 地次
死活 一百五 西仆用 北巳 内外 梵礼 重要格
字ノ浅ノ 礼 孤猟ノ 紀守

○引書

本出 負享式 九五條 新式

発句の奥儀の口決い先哲の教ふる

時の他詩の及ぶ所世に孤人の人のきゝるのを
先哲の教ふる所なり

墨引 新式い矢言ノ二の云平晋ノ頻ニ流の伝胃を
按ルに七むるを印むるノ数ニ附ニ素成て同ノ胃の青
義自筆ニて按与あり其后晋ノ義ノ儀て
八条目を作あり吉未い情補して正人未条と
すえ祢ちの条ノ要ノ吉未ニお儀ノ新式の
関係と補ノ事後の門人ノ伝云あるのを
考ノで支考ノ伝作ノとて大ひなるひがこと文的

▲両補云未ノすさて許ノ考ノえ祢ニ云お伝の中
あり其后筆実宗庵法門おを考ちり支考い
之祢八ノ去未ノ伝て后古今おをあり今
物者字者ノて世まりノ本出去来伝の伝を
ミ、庵の文体ノ字仏めまんあノ仆ノ伝云
さる人い伝云ノ云ノむ梅ノ子ノキ角浮云
去未の伝云文句各遠ひ其移ある去来のノ

それ文中に文祢六の条の表依に引用あるそれぞれ
き用のと名字あれい引てこの外もひさこの孫も
あきかに近てに補ひむさて俗布の本云ひ
馬生るより遠多くしく
秘出要決 ▲白砂人集に出ずる文祢六の表義より
許六に按与の云あれども書中に古式のさてさて吾
家の式の寸辞の注多れども其比い古字重長
叶へ切字辞仮字あのるの本云るも用捨多し
漢仏三方云 ▲書毎に出もも残立ものと勇に宗磨
九発行とあるのに庫破もあきに出稼のひさやや
大方古式のさてさて本云に及すれに用の
指の一説 ▲枕書に云ふり上書に付句の注あるい
つてに書通のるのあれと古式の字あれも
用捨ものと書て辞のるのあるに俗の注に及す
○芭蕉後・去来抄・猿蓑注 去来述 ○猿蓑・野ゝ式
宇陀法師・元禄 俳諧問答・浪花問答 許六述

○本云口決伝 京寸抄・菊松宗・孤山注・十注・お弁
東西板話 支考述 一巻伝 ▲支考より義仏伝より
他社の注い名作あれども奇乃のるのあるに時代も
俗人さうにを加へうに伝ものあるに多く
○小枝考 ○丁本伝 竹義 ○ウヤムヤ関 字屋
○三冊子 土芳 ○独云 曳美 ○金云祢 老え
▲式号時名称人の注に義の注刑くそう中に
書注にあるのあるい補ひ又其非ある中も
いそい人の弟ふむるのあるにそこにさき
あるを峯義に注て其非の考るきるのもい
あるそしつに祢 極秘伝抄 寂琴本の抄
数多あれとあるに古式を原に式に字書の速
式い俗注の形式い雅陳の伝失本あるものは
伝さに弁解セまりにれと雅あれい書出あ
伝今伝人の注とも人に思へて乃理に書
そとるに伝寸とに先哲の注刑あるに

延 六

○元禄集注 ▲閑更著 記志不得ト云 世人三越の
中ニ支考没後の門人之弁又の字誤ハ之より口ー
訣ヲ寄る人と見え 白雪堂俳翁ト書るも誤さり
其後の事を信し 誤太平と 付句去嫌の詞ハ
雅帝の事を記し 此出字伝ひと又作ニ来ヤる
詞も亦字誤多けれハ義を以て実事に是非さる

祖翁出席之 於集再出おいて下二集名字記ス
巻印 ・百 ・五十 ・廿 ・歌仙 ・未 ・力仙未詳
・半歌仙 ・力仙廿四 ・独吟 ・七八十十二ト記ス

延宝五丁巳正風始 「禮白辰六巳上ノ略名ヲ用ル
一葉集 此梅ニ牛も 「桐の風 他社 百
他社集 あら何ともなやきのふハ過てふくと汁 、
、 嘸な都浄瑠璃小哥ハ爰の花 、
一 おの花も 「風ニ冬秋 「久後ヤん 、
一 呑ぬれとも都の 「春もよう知らず
古拾遺 一 実や月間口 「通すていさ

七 八 天 二 三 貞

一 色つくや豆腐ニ落て薄紅葉 百
古拾 忘艸菜飯ニつまむ年の暮 八
幽蘭集 さゝけたり二月中旬初茄子 廿
天和元年も 次韻 櫓の声波をうつて腸氷る夜や涙 百
「去津支へ稲更一世ぬて家ハ
古拾 月白さそいの山臥 衣の雪 他社
衣裳曲 能とる哉白 生舟や桜雪
みなし栗 胡草ほうて木瓜もあさ家々
さゝろ氏 葎しと名月のおや茶の山
今案 花さき我は 「夜ろの車音く
虚栗 汚る人手を 「あくやこふ人と ・三入り
貞享元甲子 冬の日 枯白風の力ハ 「初雪のこ し も
包みて 「炭売の 「雪月や
芭蕉翁 海くれて鴨の声 ほのかに白し 三
三ヶ仙 撓ねとし 春路の夕月よ 来他
元禄 路の桜芳野もむ 露もろし ・三入り
△イガ蕉翁支より十ヲ来 以下大様ヲヲ入りニ出

元　花と枝と忙おそひて友を待　・イセ

何とあれ何やら「行くと梅のむの　三・入リ

雪を　かきつもるとあるかの名あり　ま

拾遺　杜冊をなく「時雨宴之西ハ」　「金葉」

春雨ヲ　見わたす木ずえや花月の梅うり　土二

根本式　傍さのちり傍るる　水車　百・江戸

郭の雪　門の雪をきすくるる郭の歩るる　「初陽集」「本故」

拾　久しやあれくくと初しをう　二

一格　花咲てちく郭ゑる梅うる

其命　時雨の袋を拾る西日うれ　ま

〈氏ヲカシニ行八月廿四日〉　時雨後の林と老木ぞ

白時雨　時ら林　「江戸稿ま時雨ハ十月白雨ハ十」

拾　冬ゑ事や人をうらめ市乃袖　ま

発句集　おひ人と寄るんまもむ和しられ　乃

相笑ヲ　――又ま子やさむ雪の雪　ま・うり

衡　来ていまと　「星侍の雪を」

花白　たあ付て寄ゑまる紙衣る　柳

金　風乃ゑきゑ雪ゑよりあそ山　ま「柳白」

雪老　歴歩寄かくるも時し雪のむ

冬国乃　花しや花ゑの比乃弱ま

拾　紙ゑるて人もあるし久ま雪　「雪見」

仇　仏の米乃ひしもあれぬ白ゑ　〈イか紙ま〉・イセ

拾　紙衣のぬるるもをむるのむ　ま

一句ま

〈吉野ワカクラスマヲカレ来ウラ紙ハ〉

仇　ひら白のうゑ紙る雪乃ル　・辺白

草庵　草庵の中ゑのひ文りり　ま・ミノ

拾　初杖やあもまる田の一ゑと　・うり

秋日　栗ひえゑそくくもあま芋の尾

元禄元戊辰九月改　〈歳ハカラ金ヲ使テ之科ヲ除ク入〉・江戸

白菊ヲ　白菊ゑるさ郭乃ル　や　ま「半仏」

拾遺　月出そり灯ゑむ社ゑる

あ山の　丁ゑも拾ゑ　ゑきけ傍ま

拾　其ゑゑ　「雪の松」「雪毎」

徒然　ちやちる雪の下ある乃ゆゑ　ま

二月　皆初めの二月の注をまのあたり　未全

上張紙　れ仏に成る月く去をはらうら　仏

去る秋　衣類して梅改る　白うめ　ウ

多ツ衣　仰きの家肩こうの紙衣ぶ　ヲ下ヒ

ウ九　稀お山人を葉のうせうふ　ムツ

仲表紙　風俗つもしあや夷の田植寄　ムツ

夕テ　隆家や目ちゐひを新の栗　仏

拾　河さを赤鼻　新こうの麻こ　奥

ウ九　ウ月西を「すしさや　お新の

む梅　ろうこや　ちをかをてさ風のる

初茄　隆しや山を出初の　初苗

ア山　あつこ山や吹浦ケ外て夕涼

ウ九　文月や六ちゅ「星と看陸う　未・エチゴ

死る　弥生ちこ毎形れ瓜苗　ヤ・カバ　ウ九

コモ　去りしき名や小松て義長　ヤ全

印の早　めれてあく人ヨ「おおむ人寄

ジ九　るうりてちを長ちく苔ふ　句辰

枇杷　弥生風ち鳴次ちる月稲ふ　ま・ミノ

上ナ　ちくさ月ちもをしきくのむ

拾　ちこの巣も一ツの白うふ　・えり

秋桜　一白ちうる花の　・イカ　西

タ「神　ちくちもきあうむむあれ　・イカ

他　暖や雪をすきめく菊の月　ヤ

壬生家　壬ちこ今ちや少斗の星ろ苔

舟井家　隆風ちちの名ろひ出ちこ　未全

〈十ラ〉り隆花　京さが城ヲ又隆ひうイカ

壬　巻ろ雪ちこ長しこる　桔ふ

みの　木のちこけも終ちさこふ　柿

風麦ラ　早二

巳ク光　桂草やひの実こ京ぶり　初夜

ひさこ　木のあこけも　ろこの名ろ　・ヒロ

ナ九ミノ　市中ハおの白　あく柿の中下　〈初位加入〉

アメ子　秋ちて干九　「ちうふく柿の　ま

タ兵考　月又千る隆こ実き宮ちあ

芭蕉の初も刷ぬ初しぐれ
拾
引摺て引けるの蓮根
文福　まひ水をかるや手いもし
芭蕉　柿の紅　〇こがらし人　〇をに
柿ふかまりうの葉の色〳〵付
他　ひら〳〵とちる葉や宮の琴　奥
芭蕉　芽出す二葉に残る柿の枝　ロ・永
他　掃部とや契　河州の居て紙子　〇をに
整葉集　あら〳〵と出てはさまふ月のくせ　奥
星命　年玉やとぼの声とそ〳〵杖の風　柳白
象考　うるさき柿の木葉の加る　出
俳諧集　そそれ程なる時雨と芋のやき　〇こゝ　ま
柿人子　水仙や白き唐子のとろうり　士・天リ
茶世　芋白柿より白　れ仙巻
柿白　山をこす山を見やをこうり　〇之ロ　〇ロ人　〇ロ戸
百明　芋や候ゝ三人さる　なの先
素堂集　ちんこやくこうこい美ろ　ま図
他　水ぶるやふあ西のいさむ二股セ　食

未来記　あのあと柿やあの頃
茅屋　新あるや取い明加ゝ　出乃色
寸文庫　嘶子を日〳〵淋ゝ　鶏の声
芭蕉　初茸やまさり教へぬ秋の長　聲
他川　青くも川株を淋ぶ　日切
句宝　久もう人かまれ初れ
宗牧　柿ゝまひよる雲る　十
柿白　月代をあく去風よう変る　を戸
柿実　あ名ゝ地を見ゝ　そ
句兄方　おうて冬人され柿柱
他　出頭博りてあるひまの長る　八
ヒナ　柿ゝあるふの「今ゝ押ワ手
猿蓑集　女人ゝ行きさゝ行る
猿ゝ　八九る雪ゝ　ゝ
柿高樹　柿ひ宮赤人ゝる　鬼
炭俵　出るあのひ吹ゝ考のへり
柿白　名月やま「ゝ　ヒ

炭　拙妻の厂意　男の松ゐ口
上　苅稿や裾ワの田井に初ゐ
字素摩　字素や小ぬゐのうゐ　白乃信　ま　躍
きゐ各　まゐゐ一ワゐ沙ゐ　あまこゐ　絵を
伯ホ字　いさゐゐ乃信ゐ　老多　全
読ん　——　嵐ゐ

逆　ゐゐや京中の礼里月工　ハ
炭　柳ゐゐのゐ乃ワの生る山路ゐ
上　老の〻素稿工　風原の体を
ゐ字　あゐさゐや義を小屋のお社麦
小文　ゐ多ゐのゐさとまあゐ　ぬゐ金ゐ
笈自加　れ弱ゐくと人のゐくゐや佐伯　・えり
読有法　牛原ま村のさゐゐきゐ入月ゐ　・イカ　・京
砥亜山　ゐゐ工加まゐく　風ふ屋を工ケ出　祢川
市尾　苅ゐゐ行ゐいまゐ——和ま葉
拾　ゐゐゐやゐゐ工傳をゐる文社麦　二老
読ん　ゐのゐや苅ゐて吟ゐ　作　和　・を口

ゐゐた　秋をきんのゐゐや屋ゐ家
ゐの青　あれゐゐて麦い由ゐ山ゐ　・イカ
壬　苅ゐゐともゐき米羽ゐ牧ゐ稔　ま
みむ色　苅風工秋屋をまゐ　おゐゐん　ヤ
読ん　さゐゐのゐれゐゐ麦ゐの苅ゐ
伯　苅年や麦ゐ本社の今ゐ体
去廿ゐゐ　——ゐゐ工をき　山乃形　去
位去麦信　神賞てゐゐゐゐ月ゐ　・大阪
伯　杖の秋をみゐゐゐ　吐ゐ　ま
文使　武乃や中ゐ人のゐ工杖のゐれ、
素芸　白きゐの目ゐゐゐゐゐゐ
業　伯社会業徳毋ゐ一ゐあの手次各清乱ゐ参
苅ゐて五傷を加ゐれゐも杖後ゐゐる不ゐむさて
ゐまのゐ工ゐ工世の麦を拾ゐれと高度ゐ多ゐむ
希ゐゐ工ゐゐと苅ゐる法五文字を出稼工猪ゐゐて
拝て世工挑む麦ゐまのゐ希伯る矢幸ゐゐ幸保
のゐ工出俳の出多ゐれゐも今求ゐきゐゐ工猪ゐ

[illegible]
[illegible]
門人考・お三お・ま表・タ縁寄・カ力仙・長 長寿・合 合

駅 二丑 去日 大三 就人
三才 一橋、十法風 紋山家 カ一キ角
巳午 孫考 合ト 角 道京 百三、
巳午 孫の系 カ五 不ト・三巳 あ〜 カ九 義弓
辛巳 ひさ 、三 孫硯 巻橋、六 角
文伟、七 嵐雪 菜川笛 合五 牧壹
ヤ人 土三 百三 示右 ア夕 カ三 之乃
巳未 教法集 カ七 角 知辰集、三 北枝
更栞、六 支考 行師戻、五 源芭
五申 保 三ま 酒堂 萩考 合巳 角
六乃 松実 二ま 九峯 白兄 カ九、
七酉 炭 百一 埋妓 枯花 白二 、
孫尤 カ一 沾水 義実 カ巳 素斗
おた 、巳 子サン

[illegible]
八亥 反 カ八 考 後振 カ六 如行
孤 、三 俵化 義 、七 り水
行状記 合三 汚通 匂 カ七 許六
九子 小文 カ二 史邦 [illegible]、三 角
十丑 台ウ 百二 松りン 九巳 カ一 種文
土才 野百匂 、一 考 小弓 カ土 東警
西表集 方芸 、 孫ね 、五 化
名翻 カ五 芙花 佩橋、一 乙考
土外 柳のさ、巳 三 恒 皮去拐、ト 苑
東表集 方巳土 考 一幅 [redacted] 、
寸表 柳山伏 百二 、 集尾琴 カ巳 角
冬苟 カ巳 杉風 対水川 合巳 十文
古巳 柳表紙 お巳 吾仲 トニ ノレモ カ七 月義
ソコ巻 百一 乃子 俵化 合三 宇中 俵化 合三 百一 考
丈未 ヨノ牡 百一 百カ仙 カ六巳 天蚕

十七甲申 枕冬日 歌士木因 敷栂子 百三十カ十三 角
白タ之 合巳 徒者 帝葉、八 苑
キワ カ之 岱水 波多、六十和士
三巳十九 百三 考 千馬塚 巳十一 木十一 除風
永宣 二万 三百万仙 カ六、 麦麻 合五 曹九
三戌 赤山万 カ五 、 政ちゑ カ十 苑
百万 カ五 中 後橋伏 百一 二 斉十
巳亥 市ノ尾 カ一二 生 尾ノ巳 カ五 高門
十六仙 百一 考 巳蛸対 、巳 東如
五子 秋ノ野 合八 十六 、 枕賢人 、巳 柳士
反衣 カ巳 、 東云風 合巳 由
六丑 白羽集 合紀 方六 多ノ口 カ巳 狂
八卯 赤山玉 百一 白狂 キ十古仙 伯巻
正治 二辰 巳王ま カ二 左角 八タ青 百二 乃高
巳申 山琴集 合六 方十 巴弓 七ま宮 、七王冬
角 カ之 知之 柳ノ石 、一 仲
五未 発裏文 、一 茎二

六申 ブリ張 カ十 竹司 紀戸筏 カ十三 佑陽
保寿 三戌 音月協 七一 淀之・幸 雪ノ夫 カ二 百花
六丑 又百万仙 カ二 仲・七才 多色 カ五 四入
八卯 難陸百 ロ二 フ守 十七巳 、九九 百五 陵し
ミ和拉 加計 合九 古之 岩多集
九辰 三千化 方百 、 八ノ幸 百二 加二 佐王
十巳 随金馬 カ巳 千柳 英山洋 合ミ 重平
十午 奇鈴仙 、三 昇角 柳十治 百二 カ十 二
文月集 合巳 嵐枝 八多整 方皇一 方十 被
十未 雪白巳 カ七 方十三 九 初茄 カ之 芸天
枕之金 ケ七一 ケ巳一 之 野矢ち 、巳 路矢
笠松集 合左 唐支 文操 合之 二
十申 又波 カ三 葉圃 ツ毛ン 、巳 イ吹
イ七行 合二 二 巳角 カ之 昇
多枕 方十八 風竹 門司伏 方十八 狂十
水山竹 合三 杏石 キレン荘 加十一 高月
左万 市ノ内 カ三 孫十三 高良川 タ巳一 有琴

文久

二酉 唱白話 カ三百全二 、
三午 加川 合三 白々
冬至祭 カま苔砂
巳未 星月夜 、まる松
五申 三良谷 カ三 曲家
二戌 白湖集 カ四一 比枝
三亥 青新 カ九九 タ一 五之
あ法会 一九二 え

元治

甲子 化計切 カ一 帯因
二丑 百物 カ一 風丹・三子 豆鼎
巳卯 孤我寓 杜菱

麦林菜 カ二まる
法華金 合土 え
天阿 、セソ由
十麦 蓋裏 、六 七水・十七 文星歌 、九六 、
十五 名匿 、三ま 十念・九 竹ノ秋 、二冠郡
廿九 コハワケ 合九 百一 子魚 長文集 、に 平
三月盤 え 孤竹拾 カ十六 湖十
西桂 合九 カ五 附人
新寄 タ一 雨水
六行会 カ比 披
冬ノ梅 合五 え
三の尾 合三 カ三 梅屋
秋風 カま 忠士
広ノ巷 合六 巴新
芭蕉林 、に 原雪
十月 、三 一色
二月 、マ 何声
カ一 イ原

以ての挙さる引出し歌。公の侯さ。を加えり
一□□引出し又続きあり出りとして豆掛を続けり
引出し並て▲を入れ侯くさるい豆掛し但豆掛のこと此
を見て言へ出て下を書く
一□大部分〈小部分〉其部十二〈〉ある六の者こと
変格ある下以下ある所ある多侯を書く所あり
白及二〇ある其部の白去りをきおし
一部下は七下書多侯者と出てる大方の人此知る
るあれい後ヶ挙うり古侯行去とあるとあるるる
一白及二一面の又侯下面去Ⅱ下ヶ去Ⅲ下ヶ面ホの下
を入さる大方加之白白い遠Ⅲ あ〜京〜うり
因玄加の扶付ヶ二方ヶ原氏七二侯ヶ三方三ヶとかく
も非ヶ女子白ヶまわあれい二方とかく〜又始平侯
こそ。トかい二おこう。ト孫を平ヶ書く又表い方。モテ
あれい子。とかい非ヶさて古末孫の我を名おヶウ比ハ
侯ヶ書あれい後。に来に改ヶひ却て名称比ハ其平

終わりに其名の殘るもの多し燈のおとを名殘にも悲
し但初めの名殘にはそのおを惜むにも其人
の姿見の面影にあらはれて後の名殘ともなり
一長短出付句の中を傳へ書類同する事多し
又部分に或は三去とみて引句の名に下ある
時は三去の例に其中に二去九去の句あるも
名に二ロと下す面白き句に成下あり
一位の中に「」の位あるは又こゝ侍に——○△△□■ある
も要文其余の中其不弁あり
一九二去のおい句に在ては三去おい位五去面云おい二ヒ
おいおい句にても三去ならず哀れおい面を去て百
句に八おを去て位とあれとそは大きの作なり
一若しより要言の得に出る去種出の古式を写
作しあるれは高用法多し今席上の仮
に問答を拔華して豊中海下録に入り
書を出すこと

貞享式海印録一

曲齋述

□数句に切字の道理あるの中

[玄] 句の切字とは若おのの人の中略仮令切字
ある句とする人の切めに付いる句に有る事「桐の木に
鄭重なる雨の間」此句上五ちりて人を開こと
侍云方おいに拾て対する所と二となる其一いを名
却て其二い実と成て姿を作ること

[哀] 切字の用とは句に対して其句の文こまい
ぶそと切を以て句を二つに分する所に始あり終
ありて二句一章の句といあきり
一切字とは古来俳諧の名に基づく切字所そのを
載きる中あり其一句の中間に接て此の余情を
含む処を以り発句に強て主なる文字あり凡
俗云ものいまく此字もあるむるを辞に拾セ余
情に包て十七云に約るおを句とひ只句面

之孤さるのことて余情も世話もおく十七字ゝ
る事ゝるおを手白とゝ一り宴を仮令切字あ
る句とても人のおぬ時い句ゝあ寸ゝ仮切字
のゝ中ゝ能て主者ゝの法出多ゝ人ゝ於ゝ比え
ば古の字裏ゝ時あれい孫ゝきるもあゝるを
論ゝ者のお屋れてゝ人ゝも於ゝ山ふゝの切ら
ゝも独千代の古ゝは分人ゝき時代ゝ成ゝ寸い
只琴を伝くゝ世ゝ仮法平話の御社ゝ和歌
の辞仮名ゝ世用のお好ゝふ人もあゝは歌ゝ
ゝ人ゝ御社のゝ三ゝ教ゝとゝふも時句のあやのゝ
あれい須臾もゝある者ゝ者ゝ寸拾祢の法国ゝ
生ゝ玄昊の幸ゝふ陀ゝ陶きゝいと悔ゝきゝ
と忘起ゝてゝセちゝんゝく〳〵きゝゝ寸ゝ

△布白等やゝのゝ

本云 布白ゝ屏風の画ゝ思ふゝ一色ゝ白を作ゝ目
を閉て画ゝ泊てゝる時い死活自ゝあゝちゝゝむゝ

世ゝ有ゝ御社い等を定ゝて時を限ゝすゝと云ふ事
ゝ有ゝ句ゝ句ゝとゝも目を使ゝて殆ゝ眼前ゝ寸ゝ
ゝ人ゝ言ゝて寸ゝら〳〵ゝ
△氏信い実家ゝ門ゝ寸ゝ付きゝる〳〵ゝ寸ゝ
ゝ寸ゝ世ゝ寸ゝの城ゝ

西行九 義い眼界ゝ只今の姿を陪ゝて文ゝ文徳ゝ作
きゝる者ゝ門ゝ者ゝの世ゝ古ゝ寸ゝ寸ゝ文白い文日ゝ彩ゝ
赤岩ゝの月ゝ言ゝく時い唐ゝ恵ゝの出ゝ寸ゝ見ゝ人ゝ法ゝの
仲ゝの舞ゝ乃ゝ拍ゝのゝと者ゝ寸ゝ言ゝ寸ゝ上ゝ者ゝの句ゝの歌ゝ人
成ゝて一字ゝも只今の姿ゝい人ゝ寸ゝすゝかゝ人ゝのゝ寸ゝ付い
句ゝの切屑ゝを入集ゝて上ゝ者ゝの独ゝい法ゝ及ゝ寸ゝ
△氏城老陽公切ゝく仮句ゝ極ゝの人ゝ門ゝ篇実旅
掃ゝ者ゝ三冊ゝ寸ゝ〳〵ゝ寸ゝ寸ゝ寸ゝ者ゝ

△巻頭乃ゝ句

宗祇 句の者ゝ及ゝ寸ゝ人ゝ寸ゝ者ゝ句ゝ才一ゝ平ゝ寸ゝ更ゝ
句ゝ寸ゝ時ゝ句ゝ人ゝ高ゝ者ゝ〳〵ゝ句ゝ大ゝ寸ゝ位ゝ者ゝ
者ゝ及ゝ者ゝ平句ゝ士ゝ者ゝ仏ゝ者ゝ者ゝ仏ゝ者ゝ句ゝ

寺門世俗の句に取合物と考へ〜脇の部より
出る句いとまれなる句を選て皆古〜とやされる

根本百句

・涼しさの濡れ碎るる水車　清風

郭

・白乃ふちをさゝうる郭の御名　キ角

櫻山

・山伏乃ひとりいくさや山さくら　仟六

夕

・夕べを降るやさくらもちもち　苔三

雛

・市ゝ者乃ゆゝ庵や桃ゝ　ソち

牡丹

・風乃一日吹てをりける　固友

枇杷

・先生や名殺ゝ枇杷の花　木因

月

・名月の雲ゝひくや黄門乃　音吹

杏

・ものをそも苔の下蔭ゝ世ふ　牡行

三千世界

・桃ゝ〜墨ぬ乃の岐ゝさ　文華

八百万仙

・芋や吉野風雅乃形を　移風

▲生ゝ一番後のゝく百句手引
ようて大抵揃あゝ一番百詩の言葉ゝ千
詩をはた貝耳正寺差ゝ

□脇乃部

本文 脇ハ発句ト句字ヲ連ネ句ヲ結ブ句ニシテ
ヲ定字ノ人ハ付ル者ニ多ク発句ノ名ヲ
ヲ用ヒテ情ノ目ヲ見ヘ付ル句ハ脇ノ句ニ
ヲ人ノ脇ノ名目ヲ付ルトテ或ハ
一種ヲ与ヘテ情ノ目ヲ見ヘ付ル不一句ハ対シテ
口ヲ付ルハ脇ノ句字辞ノ論多シ〜とゝくを
脇ハ句ノ余情ニ景色ノ面白ク有ル様ニ
持ル脇ノ人ハ口作ル句ハ発ノ位ヲ脇ヲ
字ノ位ハ脇ノ人ハ出ル人ヲ出テ句ニ云ハ
所本ノ一字二字ノ風体ヲ加テ発ノ余情ヲ
ヲ云ハ脇ノ一字ニテ脇ノ意ヲ見ル
▲[illegible]
ヲ名ノ名ハ知リヤ発ノ芽「打ヲ情ノ意ヲ見
ヲ[illegible]ハ出ノ通ヲ意ヲ元ヲ新ノ方先掛ヲ
古ノ再掛ヲ知リ〜ヨリ孫ヲ〜ヨリ方芽ノ姿ヲ
差ヨリモ目ヲ見ヲ付方種ヲ知リ

偖云孫は句字といふて必七句の孫をいふ仮名
意の対する字をいふ孫は付句の始る不動い字を辞
して留る時は舞一その孫と成て二句と命ぬ所は
字ヲ留るゝ仮ひきも孫と対し意字を対
りて句字怪る所に辞留苦ゝ寄とく
句字とハ古風ひきの留字をいふ俳諧の名目に新い
其名を仮用て句の魂を云敷す眼字行間の意
せれとり意を俳に意の対する字をいふ詩歌
古風に云あるら句を仮て意の透ふ不用さるる
多れい文によりて西義に吟命るすあ　さて
辞留ハ之去ト仮生り辞い先俳あれも未来ト
云余す辞して留ら大方逆付に付ておへロテツクヨ云すきく
考セさら時い意余て平句のをくあるもあ
準句の平　　の平を分ち
日俳能の平ハ文をかりい孫を色相言に乱る色
文を黄すてく句を孫て助るをいり又世に

句いあのするわひきい言立の付るあとんにくれと
孫す句い客位孫い言に位とふ句情のすく
巻　これい客に成て其の者思を口ふいすの形程い
俳くあ也んに能通て隠れ考ぬ貞あるら一句に
人を余る起まの風情に言ら見らんあ寄とあ
意のんに見て口に云さら和を拙て其好に成く
客のすあれ言立に言すあむ色ひきのんく　句
本巻自柄ハ句の一字くに姿に立すし孫に首
已の法を作るを以り俳諧祝恵吉ホのひきに主客
向合俳法するとく自他を命ら分柄て孫付に
あす俳諧ハ立に接投句するるあれい孫あくと
俳言に一方の句に孫セのしまい俳諧とにそす
諧字をひきて四諧さるんと思ふ歌に孫ハ
謡ツをシテとワキと二人してするんの名あれい客に
呼ふら立文に位するる書のとし俳に句の意を
仮て意色情和人品言語の姿を立句に自句に

作て付添る事ゆえ二句合する時は一件と成故に
おくとあるんかく付成は挨拶句より更なる他人の
揚するも作法なる事は挨拶の長いおもをまて
つきまとてい只のやうとつくろく殘て包物を祝美
古産なるくらふとく茶屋に包紙口上にて句中の
品あれい揚者の手に渡る時は一変して包紙口上い
あきなく只其品あを移ふとー又結花の正んは
係枝するとく今一件ク〳〵て振きあるんく〳〵なは
山川草木の風情を加へよりは古て祖翁始て立ふ
法あれい古風と遠ざり不謂免門にて此揚にハ
実に捕てる分柄のるく作すく〳〵古祝の不祥をきる
ゝ義の門に入あるも翁に対柄揚せ人のあるを
義い俗の後て智す社俗性い許すもあれい其
宜あるを撰て徒とせよ下に挙る「」の句いかくに
揚付あすと仮に作設て其或をとく成業の口さ
〳〵□の中に二三云を挙るに一件ある付方の下〳〵

さすあるく〳〵卯るに件を口ろい百千とも作ぎるも
ゝを他教に翁して只一件に孤て懐こせむる
学者の字とする正ゝ事ゝ
定句 句に三月に成る季あく〳〵揚て其月を定むて一
春の三月末寒也の口きに「梅に春の枝乃乃生」と一
ゝを此枝に二月のゝきと浮ーゝ口ゝ文句
◆揚に正二月に成きを作こまて手始に成あ事
季の用方実をもて自ゝ〳〵
八月 賀祝授 退官懐旧 記行 移徙 餞別 留別
神祇尺教 恋 賛教 祈願 格 古実 古弄 及格
右ケ振の景常式を名月月の梅雨と極ゝ
◆式教 通に性を許するい其詳の云たぬ事を其教
惜出の保て助る故くさを揚付る時い其云たゝで
手引ちきを姿を保て補に揚乃不論ゝ今を爰
にあゝ徒付に此教教を考とすれはもの句て
揚すて情句を姿句に仕立ますんゝ又句の

発句に風月の句は自然是は独立され、一系を
陟てなる句の位を十分上るを孫の位とする〳〵

△渴陟

色こそ乃ち弱うして去の芽　休破

おくまて咲の目を見て〳〵めら　翁

発句は他乃の弱を問ふを強き只芽の句と見立て
の芽乃弱を見て伺ふと何ふ人去あり寸去
件の上をひく〳〵恐る〳〵文体いろと尽るまん
尚去に式芽あり寸やと止むとするもつくる後き
芽に深れて去つと立てう是文弱を自分の姿
〳〵と忘れて おまて咲の六対さ今を[合体]対と
見るに知る去の発出の弱を見て知る情の句そ
云うぬおあて平句とをきを見て知る情を
と定芽まおきてと問をてみ掛を合て一句の
姿と成る故に位に云ふくも最彩て去の件
ト姿情備る句と位書まるを一表付きも

引てい去てふの目を見て〳〵めら
とする時いろのおい枝の扇とあり　お人の翁の弱柄とあて
去芽の姿立ちれい平句と貴人孫の西位を表さむ本云
こ式句を位に捉こる後て件字留辞留の位乃く
あ寸かる接拶句い情を許すおあるあこ乃てい芽の
情こ叩れて弱柄こあたれい貴式を翁むれる芽
二三子こ遣別こ五り貴門こ弱柄を嫌てるい弱柄
まこい新あて〳〵ある句も通ひ定字のんこあく
ぬおく言た今も古風と彩く言てうる句こい
と平こ拶〳〵む震むれの裏
痛いやうて　あけあの〳〵　空
おく〳〵自他諸道の句をかま乃の深去を問ふ去さ
貴式て句の姿い見立す貴人を恐ひか自拙位ひ
我に考ひ仕ま寸ひ仕ふんこ作てい不辞義と
見こ人もあり句の姿を天さるこそ云れあまとけき
の辞交とい句立こ低改する句を作るまあ乃

炭

奥底もなうして冬木の梢多　房川

小さうまそこそこ乃うてみの印　弟

初て弱こまこと頼める数を春の接拔こさるを奥
度命ならず果一裸木と又立丈梢尺すく中二目
うおを又出てうく付うり今生を屋付と号る句
老の云を拘す只赤れ有句と又立て拔する故之常人
命い伺一ツ書き梢れい除わる有ると手つきを
云の印一ツ残る姿を又出し小者を命セ
こるく枯木は塊を人こるめを限こ

「ふるくも者こ尺短目の印

と已るお沓の人を遠ら弓柄こ依今世人を多獣こ
すとふ俗位あり仙洞絶お比奥あれ彼をそ
はきくこと拔れを除こ除るこあす自らの印こ
ある二あす只芸仲を木の姿を与るのこそ伺今
号為とふとも丈恢丈時の奥あれ伺の号奥ら
あむこるを 呼 我力を強足らの印乃拔を成分
も君ら腐の小去の浮は是を高すとふ拔こ共伺の
沓云をや仮令房川と号考人ら し拔い強辞と出る
おるセよ別号こる人の様こ助こるとく君ら腐あと
力こくも祖号を高ら馬ほすきこるこ先代の
俳十度弐ハり只芸を又て候を流は者い冬やや

哥

冬まれい山又こ一里乃月　風芸
砧は浦こる考こ考こ　芸と二
言は学ーまも名人こと拔こる有あを山ま主を
付こる拔人の只却て辺地こ入りと傍又巴ま拔と
又立病未めむと砧考こ考こたら末つるこさる言
赤も又こす伏家まこらあるこつこ一歩を明さ
むと乃久は肥こる件を付こう見も屋こ

世ー捨られ一芸は　初宗
とセむい私こ之こう山こ一点、山のこ多こ色こ蓑
熊と引文て強こら却て言れある故こ蔦門こん
お月付を分柄と号て成ここり

[義] 義日ゆり矢徒先人掘ると云れたる
とも男付吉くかて素礼を深うるを宜とす
▲吉く成共徒客の句く其比乃の中孫よお沿掘の
誠を含うり又素礼を深う上ゝ[図]の中
之凡掘いすよ八九い足立ってつく一一成を中よ
伊代くと号くるも大方乃立の中ある小別名之
[三冊子] 昔は必あり挨拶句を書掘も答るとく交て
挨拶を付ケ改日掘ることの句をふ不良挨拶之
雪月花の中のこ云る句まても挨拶の人之始
▲只義挨拶の句ま只素礼兵庫の掘あるを古風の
挨ってを悟人て言月の中のこふも挨拶のんうこ
見うを改ま淫て出るおく成出ゝ義の工論あり
多彩あ自己を淫さるあり宮作吉門是者
又後人のさうらを加さるあれい明ま変セト

△客挨拶

三

擂木乃花ゆかまそあ海礼　義

家するおを見ふ刃ロリて多　秋風
花の中ある楼の姿を見て花の形る位あるう世ま
あ刃陸遠を移さるを只楼見ま芋ま表おの多
を見全刃丈を多ま南きこ多るとてかの防を形
ゆき楼辺と空ゝ見を[賢]付と号く成ほ赤良し
美巳ゝ長男を答られるあ中と見て薄り
|||ま振す――共私之
かきゝを我ま発句乃見あり　義
例　麦桂作ま　間孔　寿　知見
其師の一系を師て傳ゝゝ他の足我ま孫桂の仮
あ寸代をま仮字ま花芝を深めゝ我まるの忍
とおゝ[　]河係ゝるれま只其師を結ゝ成付
方付合ゆと多ゝさて客ま句ゝのんを述て
[矢立ま]ゝまむ反の伏矢共形之
面白ゝ雪ゝやゝむ冬乃面　義
氷をたゝく田井の大鳥　自吹

面白くおぼゆる向の一家を所さり大字足利の
羽をさくく屋の中茶屋私く
笈　　山張や刀を書きむ凡　畑　翁
　　石井の水うそくく性子　蕉指
三宝寺参詣山の懸沢吉井あり支辺凡畑さて
山の民いと涼よさ刀を書きむ凡涼を乗てくる
指とる人苔苔水汲上てそくき指を凍きりきを
凡畑乃て又る樹下の伴を付さり
杖　山くさる之伏乃比
といそく刀掛おそうく都よいる翁白もたを
殆是者も多毎望凡茄　翁
蕉敬　短さまして杖乃月の乃　一泉
多毎凡雨き指より短日の伴を足出さり
奉　書くる掘乃夕月凡位之
蕉　うき世孔小の山橋　翁
雪俳殆る和根大根　白室

序世の祝を蕉むに凡菜根を咬て白雪をあす陋者
を蕉むに伴と足て大根とも云て言いかと橋の字脚之
掘乃表元表　もあ陋東
と凡位を蕉ケるとそて酒ちいあめりき上よりく
付象伴くもるる合む蕉ートいそく蕉むてきおを
ケ蕉ートいそく蕉きおを付るてそ稲伴あれ
雪凡　秣原ふ人を葉乃友独ゆ　翁
　　青きいちこをてあす根のも　翠礼
金平ケの挨拶之秣刈の伴てた絡男を尉めむと
いちこ掘ろるを多さ蕉て富ちる服を指のそ凡
古蕉ず一ろる未芽ろぬまるのまさ去不
まちる蕉原たの哀を凡せてろ和白金平のさま
あくい内てワきーても金平の指を付ろ平加辺之
　　而て　笈の行さます　掘凡自已
蕉
　　茶探手伴豊の花を竹　松　翁
　　萩乃芒を掘ろる身　株雪

コハ医学有る者ヤウ〻長あり仏まの花ハ宇
を上ワ〻除くる等を入てゝく付くもの

宇を上て見する夕月 広八 私之

及

月代や様ゝまをおく宵の病 義

秋かけゝる屋 り灯 正秀

苫屋ゝ月をまろ庭苔の京をもゝう白くハ

月代のうろひそ屋り灯ゝ風流を屋り

風さゝくる柳の下陰 広八 自己之

神奈月始の雲ゝ陰ちゝひのんを法す

雲ゝる侯や陰てちるをみち 義

一秋ゝ雲つまる 張笠乃家 李雨

日秋ゝ雲ぬ科ゝ郡の笠ゝと青い家ゝ陰を法て柳

下石上の叙ゝ吟す拾そ張笠いちるもみちの天ゝ

荒ゝきゝ孔 家枯の尾

と我句を作ゝ句の雑稿を矢ゝも

秋ゝ花ん のゝやゝ平宇 義

ふゝる拾子の蔵 本芭

夫路地ゝんのゝる系和を入て秋蔵の代を付ゝ

あれ

とゝそて尾之の刃柄と成て句の余情とゝす猟を

己ゝ身柄を句ゝ与ゝる和ゝ平句ゝ己ゝ力ゝ仕て蕎

を云曲て奈ゝ和ゝあれゝ与奪の技天地ゝ

田粒と目列ぬをゝきの没ゝれゝ

及

旅衣 芋苗ゝ包ゝ食ゝむ ソラ

花故

ゝゝりの悦 葛をゝすれ 義

阪ゝ雲ゝ及の性ゝ雲ゝ出ゝいゝと尾て阪ゝる

男の性像の苔 湾ゝを入てゝ和ゝ和ゝ

笠を 夜言 の格ゝス ゝ和ゝ

ゝ弱ゝ尾ゝ名弱ゝナゝきを弱代てゝれ名弱ゝ

ゝ之ゝ他ゝ付ゝる白代 肩ゝタゝ

及

冬を乗乃庵もあゝや佑大根 許六

冬ゝ一ゝる小宏の煤 義

大根を尾系畑の蕪は佐大根あるを見て云るを揚老い
尾は蕪あるや問やと尋る白と足立て実閑れ
いふ蕪い足さすおの系畑大根畑のこと也る指を分
う外その白を内ってふ泊と白老の云を移影
考り○詳注くる歌い忍さてあていくきまての蕪
至くる山辺の古乳と足う佐移影の法を考ぬ九
拾 ぬるそ山を辺面や冬ちり 支考
青うて弱く燈る炭竈 侯水
辺面の中より一おを足出さり今聞と号くれ多揚考
吟ュ其中の一を執てひくする事附句もあり
月ひしき 畑 足する―― 佐私
三おの 秋乃秋を佐くに見む多 枕 野夏
独熟枝乃落る木の下 二川
茅松を 枝下と実枝の独居 居るをさふと恐て口も
独恐る指之表已乳の不自由を作て
月や老しき 茅の栗戸 佐私

清猫子尾
寄るとても頼む松あり木茶掛 木ス
空よ小去乃山も眠うき 茎二
仮令木の上を加よ寄すとも木の下陰の蕪に枕あり白
と足て其物を山張と定宮も時まちおれい席狼も
思ふしとふんを付うさるを考さ之附して
雪うりりを足する門先 佐私
三月きを未尽と立の仏祝る国嘆
弧衣そあらを荒うる去杜冊 木因
いびよい雪すす 秋乃由茶 巴老
秋石茶を床と上弧衣と宮の風を清く汗柱好の
付と足立月祥おの由茶を並うき角の空 国茶のひ
きも恨れ和を人係 佐 閉の一伝 桂も唐さも孤子園
ュ脱るものいびきおるむ山りきとトュ好白付く
玄 事おる芋の戸乃さひ
おく客う陰と辺を足佐と之物とくを

是皆とて今も當する人あり只付わくさまあらむ甚の
ちハ総てい方の挨拶を並備すれハ去し彼言し
たとへハ句も世界まて彼方お絵ものまゝ書けり只
和しと答ふのミハ総巻といえかえも考へし、

元禄の始都ニ上り蕉翁を訪て

京入や鳥羽の田植のかへり中　卯七
うまーと包む袖茄子　去来

返事

此句ハ尼舟より鳥羽上りてさかなをまお母に届けて
笠ぬき連て来し比山まへるを鍛える京入ハ洞を出め
京より鳥羽の田植えにかへし戻におする折と挨骨して
其所四の京まて初茄子を見付なりて去る件を付たり

｜わそ｜

ときぐお来たるを交る件をさそて京入と鳥羽の風情
を矢をむえより鳥羽もさかも拙作て更に飯くおあれハ
さかまて帰しとハ見えぬもさき

清江十年ニゑりし落葉

動きりの海山おかむ家居哉　イ拙
此比秋のいそし乗出かけ　卯七

、
海辺ニ家居の小住居るい漁村ニ見て動きさいハ
ちし船ニ市出する件を付えて去来ニ附して

笠を頼る心柄の秋かひ　六松
備人をねせて洗える所秋かぶ　去来
返仕出て丁都し　素行

、
浦人をねせてハお柄を挨骨してかくと賞く所
返て浦人をねせ宮丁の返仕出て海見て居る新之

久しく重さる人にあひて

如月乃人もとけて梅の香　浪化
きまんて露の清る去茎之　露石

白扇

人も枝もとけて見れぬ清の動と見て去茎さる其様
を定て二月のつきを以て去茶出挙して

国あふ飯乃風も和らく　此八松之

尾乃珠兵書て

冬梅　　淡梅乃ちとまいちく空の中　旭元
　　雪ふれば古梅の枝を日ごとの梅おもて[略]しさる草枝
　　の対して花もいちくきの字眼こ　　丁牧

△主接拶

病系さむ西行あくに秋乃雪　雷枝
　　ものをと方ふ風ふ破笠　　羽

幽

西門と見るい杖笠衣のお似ける次おを明立沢あくでも
夕ふれて笠ふ乃傍えて風を乱くもをのむを乃
もく傍の彼笠頭てもをと方ふ竹先の代を付う笠
とものでい西門ふ似ける姿も新の志れぬ拾も世てす
笠を直香と号るい西門と向一芭蕉と方ふ広を自向
自香する九こ。[遠]お対句広拾い忘れ対のおと笠ふ
抜ものを乃ふ笠を新の句ふすい時い風の破笠ト容
代を肥る句竹を寺伝破笠　字を良ト亜こ
新の知れ対とおむ乃る時ふ只乃連出乃空法のこ

まて西行ふと称ふ故い少ふまふソハ自己乃情のこ
笠て方句の姿をちさる方こ

花のさく方おくに乃新ふ　猪延
　　秋ふ志おくに情のふをれ　羽

仕度ちと方る禄のひさく月まれと夫を言ふ捨身棄
欲のふい方きふ乃と特ふ句ふる只乃義ふるのむさふ
て志おくふる句と見て秋ふ志おくに情は[巳]ふて苦ふ
此ふ情の欲めを原ふ。[津建]象月を人の時ふる教て
苦いく死人ふれ河秋ふ志おくに情の見ふ今もあきふ
おふこ方て社ふと徒退の河人は又の示ふ新て方句
拙い人ふ問答するふく或問ふ答或人の河ふ答ふて
人の河を本ふイやく見ふあすふ拙ふ作ふ一句
以昔義の密夫情原ふ法を改ふ芭蕉を志す為情
先世ふ戦の古風ふ机ふセ一人のふを方伝ふる愁こ

三　　赤橋寺更ふく枇杷の葉ふ　秋風
　　ものこうふく山ふちふ花　羽

桜の手にあら別てひえのたに並ふる体とみて露にし
草の水は流上て奥をあされなとも〇〇の夜露を
しみて奥枝につもる相を付たり前字は夜露とおもし
姿なれとも末奥の生てある風情を見せ桜は夜と[座也]し
たり〇[評注]桶付きさせる意匠にて句面に人情なくて芳
柄のあちむ付させぬ甚くて古人の未到大なるそ

　寒きき揺〇に枝葉をききやり　如行

　古人のやうなの　秋の風　翁

後按

純子乃秋果に過て一秋化なる差見せむとする枝葉を
うとせて古人も枯子やせし秋の風乃寂を志らしめむと
つさを計ひける相を付たり是を[評注]と号るは限なき下
に情を転て死を傍に終する者之ア如行か大に
すいはいはあるすらく祖翁なれを此探あるまし

　[句意]寒き揺のおもくく家翁ほい私之

　おなる家の病せまし枝枝葉　風流

嘉尤

　見し兄てかる風の音　翁

我病はせまく其上枝葉も彼て法なれはいろそはに枝て
よれ凡の枝おを弛之せむとふんに[才情]あり〇[甘葉]
主家各自句の遠付あり　又其次に此法ある事を
志らぬ故く差示句を更作に手技の枝葉のあつかひき
を染しとかめきは翁は世を捨てある傍つきなる人にある
そア旧契を侍て自挨々他しとり

笈

　菜種なす薙のすしやタ涼　曲翠

　岩おもしく　あちさゐの節　翁

本句を狭き門先と見立涼しく庭木見見寒蝉の啼なる
所に志ろて腰休みて秋心寄くにわる岩の庭おもしく
挟みれば二句さへと注を應て所面く相に起情あり
實は涼風なる姿あるをかく起を写して事なきるの
に初術と称しなり〇[評注]近刊トシテ附会の注を入たり

一

　採るとの名残く乞ひ秋の枝葉　小春

　あをき月秋乃夜さしきる　翁

本句はいさおるやに咄く採入るむ枝葉もねるとの風之

[illegible]んあるを名称をむね柄を[illegible]してよき月数
を之抜ぬ切て後す抜を付こと

奥　新こな焚よりもこ孔作麦　如舟
田種と俣よ　抜乃新記　義
麦陸ヨリ田種と之五焚よ卜令言を左の新記ヨリ中
付ら抜ちこ〳〵コハ之の白麦を病ちもかいそ
あて自他通言ちて抜ト作こ〳〵コハ白老の汁を抜老の
汁ヨ奏ヨ格ヨ麦ト移ちるまれ老麦ヨて
抜の舎ち　作のもろ夜卜伯之
陸の臣昇れたるよ今い考る人あ
荻やうを又ちるうかこ〳〵そ　[illegible]稍
市の子作乃老ちる細布　ゾウ
ちるうち与ちて荻後の汁と芸帯を市中と定て者
の件を付こう細布い文玉の老ち成白今ちる抜と又て
つきの姿あたりこき加ち白老の汁を[illegible]すこう
玉九　早今青陸ヨ張引て止こ〳〵　茶室

色せちも〳〵き初州乃稍　ゾウ
新りて止る用を[illegible]〳〵てよ稍糸ヤむとるよ夜
セて後こるあ〳〵ちうを付こう
新を芽色ヨ抜て
之〳〵ぬ抜ちるい時白ヨ芸の家根　斜茨
後旅
火きこう声ヨて冬乃　号　如行
ちぬ抜時白ヨと云て用ずて家紅作て云ちを
尺ち抜ヨ之立ち茶焚付ちる件をもこう言ちく
こう火乃火ヨつちぬい面ちと作之て独ちろ　1
様ヨ止ち冠作の火打の芸を友ちヨと見て言ちく
ちの〳〵ちい時白ヨと新ヤ一汁の抜ヨ見ちる一芸の
ちう〳〵こを付〳〵ち自著の一件こ

栽の十文ヨ芸尾を汚れて
病乃秋斉ヨもむ抜い荒ヨちう　支考
対　恒の木様て新ち乃花　深ト
荒ち芸尾の大防の生恒ヨ葬のまちひこち抜く

自仏ほきき花乃新露

と業病を苦おい一枝の病も病ふれ物くと曰ふ

時文撰さえれむ光栖を付るかと信るる人さて

い才一仏人の稲さるかもいるる

人々さの病を治れるる

木乃あ一円花を手付木枝手　素木

夜実

夜一枝笑ふ名月のもれ　世幸

木のあ一花垂ふ用を月を又ふる

おたとめて

葉や波う速ふ花と花　眉泉

三和

巣う通ふ日い鶏出二羽　其二

池沼の薄と花水辺の葉さもむと巻二羽と

いく[illegible]して言を列うる

隈泊乃月を拭むさ風を払

其二波をとて

乙ちやちの新も備あり　丁牧

、

嵐色ある強い　友彼

あちの新ふ　お花の嵐久とえ　春う新もの葉を

ちやてく嵐色ハとちもの葉の[illegible]

[illegible]山ちえて来るぬ月　共私

子歌笑恋い新葉乃使ふ　麦士

ふるてふかるる宿の　稲　唐え

、

時ちあ花ちの人の尾花う来る其国の新葉乃

使ふ[illegible]ちの人の言ねをふ葉う笑て時ち

少する使とする葉の稲花時言を付ふ　葉ハ新

春の宿ふ　夜う[illegible]さ来あき来搭ある時ちむ稲

う葉ふるるむ字搭ふ　[illegible]使　ハ言イ新来の

格を作るい文中の立てる代をして□号ふ

[illegible]を作ふる袖の風の恋共私

〈餞別送字

檜笠雪を寿乃やふ　相芝

葉一花ふ　見色中　三和

辛き宮中に室一人の舎を充とする力拂ふ歌おも
ふに一束の門ちに豆色て辛苦を清く姿を合ふ
○[illegible]言を充とする風狂人に和保稿を見むに吳拂の
ゆきを付ふ底非ゆちて見をむ底、瓜を出雪
中の吳て季寄る出て誰ら雪をてひ口ちて
底を出る出あむ之ふ浮世の式やのある
を一く注せむ可るさられい已下い閑ぬ

白秋　時に秋ものをあく拂のつと　青沾
丁を友森に風雪の月　羽

時に秋の哀ある知大船の序きに赤のを加る拂
るれい寒き形めをあむと色る西の赤を見る
る姿と足立る丁を食ふ丁を友ねと生産拂
ふ拂に思ふの分と裏むくに底江戸ふ
大仏を赤ふす白に同ふの姿を立すと空ふ
、　江戸橋に通ふむ武蔵くん　曲子
　　淺漬の赤に形る　月　羽

仮金拂ふる如く時百する波毎に信釧尾の棟の
橋に人通ふむと乃先を昇る白く氏白江戸に通ふ
底姿を立でい立注とある有に橋の横を[illegible]せさる
峠上る人の行れの茂くに陵向て空脚を足て依い
吉々の江戸に人通ふむ底の[illegible]く拂に有の情に
海を立るおと乃よう

時雨くに遠傍孟むに　茅白
、　大橋の宋に他をつぐ人　羽
白ふの尾をふに時の茂ふ乃てさびを乗まむと
いく白ふを茅尾底姿を立崇炭も書大橋白れい
宋を焚て先人の他を強むとふんをやふ白
事来れい拂も来末の用ふを作をつく人に生乃に
作て沢左の作ふう又宋底に有に拾木立の尾に
時白の寂所一老も炭と底時白の寂を矣まむ
、　白ふ[illegible]に陰をめも事おおの達　松江
　一おけふふ閑　一むれ　羽

めもとさくる方をも捨の情弟おを付う事
秋のうきは衆の声を[匹色]て庸の数を形う

よ[illegible]指て様く[illegible]れようみく雪　木因

冬

冬乃逢とて風も後ろ〳〵ふくうまよき程とつり
かれまいふんうて[鼎]の逢付く

秋乃[illegible]も先この[illegible]　木

萩

萩う様やうう萩ねやうう　翁

乃先て反て萩ある[illegible]や萩ある[illegible]や
ねむと[illegible]て日代の逢付く

栗

[illegible]まよ悔おく山の雪　会見

杉の茂をとり三う月　翁

梅と逢て[illegible]ふ上を寺代[illegible]て[illegible]
の杉乃の三月を形る[illegible]を[illegible]人の
[illegible]戸掘の掘に似て付[illegible]白[illegible]の掘と
同代[illegible]古木[illegible]の掘を足て[illegible]の掘[illegible]

[illegible]引也く都の[illegible]て[illegible]
[illegible]ト[illegible]代足ぬるをいひても
[illegible]ト[illegible]と[illegible]世俗の[illegible]
[illegible]方[illegible]あ[illegible]

小文

[illegible]をすめぬ[illegible]　山店

又あひ牧[illegible]の空　翁

[illegible]麦喰[illegible]人[illegible]拾[illegible]て
[illegible]て[illegible]れ[illegible]改て米[illegible]
と[illegible]人を[illegible]の[illegible]て[illegible]園[illegible]る欣食の
掘[illegible]容代て付[illegible]る時[illegible]

サル

梅若菜まりの病のころ汁　翁

笠形〜き去れ　暁　乙州

只まりこの代こを[illegible]人の往[illegible]きを付う
笠形〜ハ初[illegible]て梅若菜の移こ[illegible]
初[illegible]て古[illegible]の歌を[illegible]
[illegible]実[illegible]ある[illegible]掘[illegible]情の白
掘する[illegible]

を比所にて俳諧を更る時の式目を新て永一日
人を作るを礼と人倫道を人ありかくて猶まのく
武百日を反秋冬の字を入ゝ初を伝の句も乃は
合て千集不朽の言葉あるむ宝を人勇柄の誠を忘へ
言葉て乙字を長四くおくる　小枝
ソラ　花世ゝ〻ゝ〻ゝ山乃曲月　ソラ
後を敬すゆく絶を和歌を比るを陽て言る
て起を言る拍を述れい花世乱ると乱るの姿を
立世見と作て全て言の俳諧を又分て拍力は
言葉れを拍を述れい花世乱ると乱るの姿を
俳句を西へうひ〻〻へ　智行
時を古を西へうひ〻〻へ　智行
拾　為しもゝしさゝゝれの者　伊端
只時をあふ空の月きと屋あとお所る拍を付う
入拍と空あぬ平ゝの空に月猶ゝ
武力は成てゆゝゝ同後山　松笑
ムウ　布子拾乃あとい帷子　松りし

強力の為お拍る拍を付ゝ差分袖の通辞もて
云一おおるゝ麻乃さ衣に八松ゝ
白扇　乃先も掛安き方を萩と月　依化
拾きゝ〻〻くむ〻もおくゝ。　支考
月歌の乃先の萩ある中ゝ法れさもとむのおく
を守て実もねゝ月ある不ふとおちゝる拍ゝ
乃先ゝの宮ゝゝれお似てコ八次付ゝ
打　拍乃時を乃ゝ出来秋に八松ゝ
八夕　新立や扇ゝ柄杓菓乃花　文来
十内　面をきれも岑ゝ月今　其三
殊金ゝ立ゝそ　ひゝく菓　兼次
あふいおのかあ〻乃萩　二
三ゝ月拍せて菓の門出ゝ　和什
くゝり乃巾ゝ木瓜の杖　二
足医れも英宝幸月ゝ菓　山只
拍乃柳もちゝ去ゝふ時　二

きさ笠又は傘の木乃透て目陳きさ伽と

三月　先陣の杖乃さきに風〜青門　倚斧

桜も見やゝ石合の花　笠　二

門辺の芽花して先陣と老武者の唐ぎ　ゝ〜て歩ん

六百合の走ゝて実豆を掛〜る芽伽の曲と

風蒙乃香を吹合る新蒲子　間竹

笠を木ゝけと凍む桜　根　二

白い分袖のんゝを只よ〜す素麺の芽と見て

傍の木張と桜根笠抜さる旅人の休む伽を対す

夏　夏花乃候てや鳥夏三百里　二

宣て鹿乃関ちも寄〜　里和

鳥夏のさゝ比三百りの旅と比く鳥夏杖も向の

花さむと夜ふいかさぬ代を表ふ旅と見花を

伽見る姿を立おれて天を対さ乃を[illegible]

冬猶　ん文を待そと厂のお子　るお

十里五内　鹿ゝをあゝで明る去の枕　巴新

夏六月　門ゝも新々〜夏の時見厚　李仙

白尾の雪を見出す川明　新

柳十三月　也く笠を考ふ柳の風情子　花りと

ゝあゝてうゝ乃夜防　新

かゝるお好あり凡俗の誓古八回歌回伽の句数多

逃て一字一長は対分て学ふ考くかめゝ〜

△苗別

拾　杜丹走を除く苗の時のおゝ　苗

名月涼〜も弱の丸　洋　相葉

弱傍乃杜丹と見て丸洋をよセ弱ふむの数矢を

[illegible]〜ゝ苗おのつきゝおの情を作ゝ弱柄と

洛の去来を見て其りのおを時

也りゝ一寸風のもゝ〜傍風　十丈

附　おひきゝゝる傍ゝの月　去来

雑話宣ゝんむさゝが七ゝと附する人を傍を次第

ひ〜也く風流〜時之の句ゝを舟も也り返す

もろ〻ふく風の音を枕て仲の秋の月いと冴て
篠をもれる庭荒波さえやうの音荒篠
の揺ぬるをまて白き座敷する程を忘れ

三和　菓月や其名乃とある日を　甚二
　　老ぬりも今宵の秋そそ　比能

名月や此と帰留せ山人あれと情の白ある所と
姿を立其名乃とある日を月数を数くそそのもと
りも川干る宿のそそを待山人の庵数を分こう
り帰留の人を見て者い数者とみるむ

病後稽古の人を
おくるきは安の日和や陽春　二
小春のたひ〻咲を実朋　九城
春やもと陽るよ見ると対て寿日和をいる曲学く
寿きと名ふた十月乃こう
と病後を号る九情は逐ち式実的放ちるも
斉　二月とは又あふ秋乃名月　風茅

笠きる名月の月い笠ぬく　抑丑
二月に二月の彩と容の白きをもて笠ヨおの姿をたてう
り再会を発る姉せの時と改発
人まつむ〻の病か方そ広八秋之

△首途
旅人と我名呼をむ初〻名　義
旅衣　又山茶花を病しまし〻て　由之
雅やこそ笠の山茶花に冬日のつきを含て門るま
風狂の姿をりふ俳の一件そ逆分之

我名よもれむの白をゆて
たひ人と我見むやさむ笠の雪　如行
相禁子　盃を〻〻うこひ〻〻　義
我見ちやさむ強人に相子もて笠の雪を次き大盃と
奪胎　伊宴の伊乃数る対あ〻う
哉
菓乃香る山路い旅〻病上　東花
的とり歩す松乃名月　風乙

言は登る事九の宴と又て松山路の姿を立てう

所　理い花は千りの言乃そ遠う家　風芳

てめそ月乃　祝る夜明　南に

千りの乃も一歩より始るとう今年出の仕

「行文」おまえ自をるそもちそ此の私

△行文

ウヤムヤ　堺せよ行方す定乃友君　自准

秋をさめくる　堺のさ一杉　翁

翁の函を止さる句あるを只捌求る者と又盗坂の

杉よ雀の拍をすり上さり久まい久二と通ひ和の作

きく月そ寄そ寄を坂を立い最古云く

衝　いく房葉文拉袖も後す　春兮

こひね乃まれを又する駐　翁

夜と房すの時面も整れと文拉袖も祖も後す

兵後さい坂のこと実ひ又する振の自他通と

附　風狂まそ痩てくりぬ素の杖　小枝

杖乃素を今ふくふ葉乃素　十丈

葉の山路のまれやたる風狂の寂を知る自他通と

土産まろ子供や異を杖の風　河茂

、

皮こ明れい反故の房もれ　丈

何をそてかと云と此物を拾る河茂こ油月花又

セむと皮こ飛くを思い出産出すと思てきを知一を

又て作白と又立てく行う房素い杖風浸ふく

公情白い皆ケ拾こ考こ拾こ素ぬそ塚を立てく

「おもあ」一月のされ多底い茸汁

乃九法一要衣を一番を入て

表藤　先とまれ五名い雪乃一よをり　正徳

多作乃ひよさい水　仙　魯九

泊ふくさい一瓶を生てまひ条むと水仙切ふろ

言の月乃姿を立て小仙切ふ出ずて声を乃藤村　又えき

行文の不掃除も言を座て

冬柄　拾よせ拾ゃ雪乃山一ツ　夜加

手水柿とい未て大樓多　慶文
柿まセ狹き柿を又出　樹に高きを伐こり

△雜部

熟田の社大な彼築地の例て義ら彼而は
繩を張て小社の地を下に紙を石を居て支神と
名のる茎茎人のまゝにはさらそ中心正行る

三

赤のふさ柿て屏ふ舍ふか　義
赤そびふる根除大根　相紫

往来を止る柴店の絢茎も柿る根に[illegible]して
其庵の根除大根も房行臣に赤ひふる家を
又ふふ義社又の赤を又そく舍字赤くあむ

花を井亜相の巡詠茎を和て

京を出ると中宮や雪乃宮　義
手を赤ふ〳〵は柿　業三

京中宮の地をあ〳〵又行ふき付の糸を付
り柿の姿をあふ義をおの中あ出に成て

[illegible]乃位の残る白砂に私
来り河伸栗のふけは居を結り

屋家

屋家や月を見ぬむを彩乃栗　義

ダテ

柿に雲のとまる片田州　栗秋

ち茎の義に屋家の姿を立柿字に月を見ぬ[illegible]を
付ふり宮に度世三味の中を見ふ刃柄ふ

葉根を喫て持る丈夫に後結す

幽

三毛のふ乃大根辛き幽れ　義
一通ひく木ふしの青　玄庵

大根相の迎て大根の辛き幽等る白と立世を
風を付ふり例の巻れ中と引変ふあ

乙おう二稿を携て来りる

笈

茎の戸や日暮て[illegible]菜の花　義
柄まのする為桶乃月　乙秋

茎の戸に柳先て居むと又そこの上水桶は
投込てる菜を入て洗ふ茎さ居あふ桶の

月らけを入る葉尾の件を分て

白雪の二子に捧げ桃後の名をよて

芙白桃より白し　乃仙花　羽

おなじ　ワらやの前に咲雪　白雪

只桃水仙の白し　芙蓉を入れて白き雪と

ひくうせうり号を葉一由をいそ立後とあむ

葉花に桃あり内八ツ角尾をおり

未

赤桃　赤桃と桃や梅乃俳　羽

羽に到　梅　花　嵐雪

庭前の桃梅を眺て花に花の二月を重て葉俳

移句あり　一日　行年に桃梅を折行年に俳を

拾て言く拾て言く拾て言に見ものを登てとむとする

を拾き上て載る花の拾を拾う羽に見

要と我仏力のみと思て満く笑まむを

古れ監の古実を語て

羽

月やその件の木枯乃下西　羽

旅人おもそ　おろ〳〵の冬　佐木

件木

件木　旅人お前乗せ　[illegible]の一世尾之

俄に日夫代乗に小性に富民ニ十す

俳諧の義　裾に　一代　羽

上十

杜丹乃花を　ねむひろ庭　千川

裾の番に踏る拾と又て表の位の辺より花後羽又の

件を拾る　[illegible]　小性の仏を見て自己ねむ

なる氏にて太夫名を拾す

仏

ひくくと俳る　羽や中乃峯　羽

表拾ちはく　夕立のあと　安世

羽の下に中家のひくくと言ハタ立後再ろ中の拾と

[illegible]　高る山の件を立て青白の名を立かちつく羽に羽

の帰りを所より宴に新参青曲を見ふおきの逐と

性の女の様を祝して

乗

白乗乃月に立て入るちもか　羽

乗ちよ　ちを除す新月　その

ちりあり 白き花花と 図 拂除の件を付うもみちい
和白の宿をして同客の樓おくも一餐一泊と交て逆
（きものあり 夫井の祝いいるる泊を作るき

荷兮 ことをして翁ときえ

風乃さむけ 雪よい家も山 落指
よき家つく 雪乃又変 翁

金葉

雪よ白いく白も山る 拂あれも 桃花おき家をも
拂も山のよき家拂く 雪又和 主雪よ白いを付う
庄法よるるあれも 拂い 岐阜の 又家を 居う
手 木槿 ことる 病 まつ 去 私

我も 誘もむと 俗の 旅宏を 高て
考 一 て又 せ やう 田 樓 斉 已百

笠 笠改めむ 不 彼のさられ 翁

ふ 田 舞 庄 義 ト 少 ク 一 ま 母 も 彩 一 きの 宏 ま
出立 い さ 又 ク 人 り 笠 改 め む 庄 ん を も 変 戦 る 日
も 衣 を 改 む 庄 古 語 を 含 て 夫 法 ま 不 彼 と 好 一 て さ ま

れ ま 笠 の 一 句 を 立 ま ま 表 紙 く

終日風 流 の 言 情 を 尽 す

笠乃 風 ま ま 付 す 梅 芭 宿 化

自 翁

去 孔 日 ま ま ま 芭 蕉 の 名 れ 乃 子

芭 蕉 の 乃 き ま 風 ま を す 庄 ま ま 新 発 句 を 立 と
ま ま ま

自他物我の新念

花記

世を又る 拾猫乃中の 高 高 高川

只 蕉 と 拾 猫 ある 芭 蕉 の 乃 放 て 世 上 を 又 る 拾 と 図 て

ま 付 ま ま 拾 猫 の 和 ま 名 を ま し ま ま 不 拾 の 拾 く

一日 又 の 高 快 を 考 ふ

秋 と ふ 風 乃 考 む 芭 蕉 子 キ 角

花拾

傑 て よ く す む 内 井 戸 の 月 定 良

乃 ま 八 風 の 快 き 砕 を 立 渡 井 の 水 汲 ま る 件 を 付 ま ま

萩秀

空 や 秋 枝 花 を 拾 れ 七 多 飛 拾 角

月 ま 加 く や く 立 色 乃 雲 く 奈 吹

カイ印 一

陳發正会をすむる此之成仏の相に換えて只やすく

看病の人に対し

祇園の桑い咲ゆ初しこれ 信化

祇園の桑の咲ゆ初しこれ 信化

秋盗

兎乃末さく小の底ろく 従吾

祇園ハ多人のゆゑを只香川の桑と[図]さり

房務舎に会す

桑に教よまれてや村み寄 先放

信寄

あも少ゆる風乃月 去来

初の風士に成る挨拶をあるを桑おく稲刈松を

衝ける旅と[図]信おゆ風の月歌を対さり

寄とせもとて

をしゑ寄の形ちさしと言て 廿仕

ブリ

筏はうの〻寄き 浮次 涼

只寄の花ひの降る旅と[図]其川辺の桑を手

さく人舞る辺を寄つ〻寄のんをゆ 秋

北の市を仏生庵を訪さし

六行

只すきれぬ松の陰や冬木立 東雄

雪掃ける色の戸帷 多武梅

布白い仏壇の寄さめんゆるを只おくる松と[図]

寄は入只すりくき体を分めぐる寄それ乃

飛鳥をよて注上の松と定さり

時に実寄を拾てふ侯品の風友と偽る

連歌や兎も見ぬの松ゆ ヤハ

一株竹のそめる 多東 仙昌

只寄兎の白と[図]信打除乃毅竹の反上る寄

兎の寄て雨ふる旅を対さり

天満宮月次初会笑

梅桜松それ乃寄ゆ秋社月 其二

和侯よ梅を吹る丁多 寄及

小枝を寄に待乃て

玉乃水信て古阪の寄ゆ 春拾

寄の花さく 卍乃川上 お枝

△薤蟹

尼肥 自筆

むつ〻と利て悪れい又きし　彦川

おうでい至ぬ　芋のもの中　独ト

情句之仏を入て水ぬむと陸さる姿を見るよ

芋あれ重至蟹あれい白むと芋の葉を訳て

句しらんてかく付さる 齋 ひきくたくい「州きいきく

かくみいおくや芋に重に句を仕立事うたり

利とうあ土塵六殺九月を　涼之

三和

裸ぬ効もをくぬ　松　角呂

情句之仏を足て九月をとと云むと作者の掛を探

尽るよ名利の木ぶち集〻姿と自ら分れも

裸ぬ今を之ぬ松　之　乱あるを知て世を捨て

ぶいあきわと思ともに変ひさむけ忌今る捨と人と

赤木をして芋木を取る 鳥 通 齋 の芋仕ひきし

青新　花とれて夜をんの青ふく　玉之

自筆　ひるねを洗さ今夕方　温古

人の言新ぶ夕良新の下涼の快き捨と見こう

代ラキ 北内　白〻〻言きを度の　夜更　巴青

柄仕きくを山ゆくきた　八至

白き世乃の柄衣を捨て出世乃の山林を捨ふ

水芋月や不二の天高も陽ち　李義

一夜乃松ち　俳の柄　友　陸五

不二ょ三保の松を対〻て表紙を尾〻る典高

あちさわや芋十徳の保仕巳　之去

風姿もりんく迫も帰月　去松

十徳を委会と見る地の帰月よもの陸きんもこう

自ラキ 十内　十徳ち柄の麻も夜斗め　竹秋

風の芋忘も門　朱〻〻　之

麻畑の迫き十徳きてあ〻〻拾

ひるやいろ乃多新の笠候　帆十

ひて涼〻は山寂乃明拾　之

又良の柄の仲之ち天高の乃と夜ら一もあ〻

△物宅賀 并 年賀

よき家や花咲そろふ七ヶ戸の栗　菊

蒔て又也る　秋きくれかな　知足

大原成西業花は笑ひ古猪飼の白あるを只花の咲乃

栗畑と図そこら蒔物あり枝葉も咲る伴を除くり

白雨　菊塵のあちらをさくまし　梅花　宿化

住うもれて酒ワるる月　汐徒

菊の外を寄さる招あるれ梅も咲るる東家

冬も住ヨまれて月も照反れ戸んの酒と対さり

是おやあ仏のあるる花の新　化

冬梅　庭乃梅も冬あらう月　昌風

煤せる家反ほし冬牡丹　庭之

明るき家うる書乃掃も　六沢

何ぶも戸の白ヨきヨ向ー　二色白花都る伴ア

。

すて年賀の句ヨ

数を寄ふ　撰

去梅花と　庭家数像くれ　めぬる生先

寄を　枝うち　おす手乃　むきく乃　伝

白雨　伝ふる句又ぬ先ふ　梅ふ　多梅ふ　さく

△文墨賀

月寄ヨ梅又も行ー　梅花　宿化

白雨　ほてふ去れ去れ　去れ行ふ家の去　林和

梅枝ヨ庭家の梅と又て我家と対ふ余庭ヨ

正風ヨ梅ふ　ふ伝ふ　ふ伝只の句と又て寄を立花家

伝家を対ふ　ふ梅ふ　ふ梅ふ　ふ梅ふ

二尺ヨ又ヨ書院の不二を加ふ　壹平

冥　丁の庭乃空ヨ七文字　庭支

二尺ふ不二を掃ふ伴と又立向ふ又ヨ丙来る丁を

対ふ七ヨ丁ふ排代又祖芭蕉庵ヨ碑延文の図之

三ヨ　梅ふ梅ふ　ふ梅ふ　ふ梅ふ

扨ふ庭居の梅乃毛ふ　平

又ヨ陽乃梅乃平ー号　有保

彼庵梅上八十猶ニ其庵中ニ伝法の心を含る祝ある
を只雪ニ庵の梅や寂と見わ孫乃末の件と定て
日其之樹の松を対し寡ニ梅を秋ひけり

花も庵もひらく春の日
庵をすゝしき山居志めまえ
不易を仰く松の月かけ
源ハかれさ友をとりまる

其氏投手法巡自視祖徒後第抜思ふのんちて
衛甲季を分て梅亜揚する人あり 而古仍ぞ引て
貴武をとくニ式ハ其人忘れて白今改めむハ此ハ暗あり
とやり借情かて心も言あむアく風雅ニ於ハ神社
を残とせするヽと知て稚募る人を侍語るし

△初会

去んとくに冬ハ美くも名香や 花
吹上ヽるし春乃鳥花 嵐志

東
芝草菊うり春ある美の往来ふ大尺の拾え

其
日既春をさすりて鶴の心かな 其角
柳ニさきまゝ其年の相乃実 文リン
幽
手まゝや春日の名ハ年月我 角
筆取梅をたゝむ玉氏巾 介赤
コ人
あゝむ乃二尺の黒や始ぬ 孟達
それ日浜我ニて三月 去ち

孫我
芝草菜ニ一多くし麦白畠 乙由
新ニ投ふ鷺我左笑 杜蓋
「花の本ゝし 翁 初る旅
筆試る 宗の噂
と初会の心を作るハ持文の私揚之

△納会

すゝ掃やられ古く病の寺新 翁
小文
ふくれて高我ゝる枯竹 山居
高宗まて竹植竹筆も森話りハ引き尼庵ニひく起
二尺
皆袖め二尺の庭豆を手のられ 翁
志の竹淵ふすゝきの風 佐水

芭
見てへ山や納の　庚申　其色下
柱お登り体黄水仙　宗和

コハ
也く年や以為の庭も九足余　其代
廿歳もう分きる冬ある宗　和海

你
年忘盃干桃乃花ちらむ　洒堂
ひさよ家かる琵琶の風　ソ堂

盃ニ桃出て手作は季寄を恐れ　葉扱出画乃
和客の宴と見立　ひを得する旅を付より

「陽まを　余体ニ拾ふ為の日
年の係りよる　友子」

あとく納会の人々て右句ニ拘すれ交するを非之れ其句
ニ其会の意の詞取て早わかりきい採ニ其何を納会秋
する事も稀ニあり会の人は其出の上ニて旅作と見
立るらし句ニ其出の人を採ニ作るい於出の外情之と云ふ
を武人雅旦「句面ニ会の趣取ぬ所ニ採ニ口さと云ふ
まらせぬ時い其出時のおい何会の意も書れす」仏り

ソハ姿先情後は　正風才一の法をまもり自己の邪見之

△余興　多行田各

次句
庵一ツあるニ至りいそく露　揚水
夜月の枝を立し大葉ち　為行

此句草木を云持ちり家ニ至は低き根見草かむ
ニ庵と見てるときい大らん家かむと定て庵の姿を春暁
あらす此用の枝を立しは右句ニ余力の活之

茅川
干魃り花なさえ冬の梅　佰化
紙衣の衿ニ庭おり乃袖　小枝

文月
和の花や雪の大地乃雑萩　り和
田植乃たての笠ニ夕采　嵐枝

初茄
まろうちの眺や雪乃夜舟　り夕
為ニあるく杜北冬　枯　呉天

呂影
蛍火もいかよも許す団扇られ　義上
搾ちら重る周い膏の肩　何声

余興は儀式の書終て後時刻もあり其席も営す興行

ある時すると梅鉄句合重賢おとまるも又小老
をまくも余屋く式の会ゴらい必余屋ありとふまたこと
あすゑ常日余屋老あいかの句の宜を位後て
持合をくす曲屋句五さくらで俗性拾ふ丁又
後日あく一体の変化は肯をるの余屋のんりく等
ゴ手世さる一瓜の徒僕一カ仙の案巳も必余屋下略
とて三おを出世本句千夜も名きを限うり九式の
老いま天を始て夕方を孫れ夜の名きも可あむ
時〻本老調をさよう余屋まくも夕案の句とい
余頑く又夕夕案句の梅を各労を情を述て

すゝき風をいるゝ 梅先
子多ゑう子おて出る 蓋

式い弱茅を孫弱一式い月みよくつろくおそうと
いろを老屋労うとて丈を句を述む老下の拾云お
ちすや孫を労ぬ有を調る余屋あれ玩云も述て
又ゑる定祝をもすきえ序上の句梅も云意あすや

〈弱忌

白羽 云出すもりふの仏乃をさうお 限化
文永十二 ちゑふるを長れ社あ仏 夕兆
一日も悔乃仰する表れぶ 化
月十九 畠孟イ言き春乃花 林和

越

手ゑ中に云乃る夜を初れ 支考
花に五羽ゑ言き栄 恒 高伯

八月

声のゝい枯世ゑ孫る羽ゑ 可徒
ゑれをてうそゑふ文の案社 庫支

古俗民兵衛の句梅を同一 依式附さる風を弱ゑを
あひ付るを丈地の老屋皆 俗く夜衆桧香 高 ゑ友
ホの句もて梅セむとす印白乃をき追屋を句屋ま
丈句所ゑい梅ゑかあちふるもあり弱ゑいを多ゑ整
ホまする予あれいかの句も余宴欠おるい古く梅い孫を
必仲を有おむと俗もて示セとも四隣の俗保れい
ゑい無おゝと以て法ず依ゑ附屋のゝと数多作設を白

木白に一番の美あり梅に千年の素ろむや各の
ほおりて白の姿を付分てよと云れ亦人既て
刃柄鍋の何も通て初て付さるを悟ぬ

△雲丘　正徳享保の頃三有へキ伝まはス

東山

享保十五

たれいそ梅を寄うすみ初　君仲
まう光をそふる去の日　白牡

一点乃松い新　雲歩　た柳
人も花う法き山陰　思三

是亦梅是に向て白牡丹を賞むれ雲字を冠して
光を添と不易俳句の志を結ぶ事を未代
文稲を初めて貶く悔作俳連の星　金光乃の巣
初と付むい文俳立の梅うあで古人のいを敬ふとい
むなる白に雲丘とあるい只紫色斗分も文情う
ちむ常作に元ちる白初に梅に紫情の詩之又有
も雲丘と俗固に作でも文紅あるいとれむ又初
言い只花乃風月の朗詠に面白くむ俳中に

花供書梅翁会始うり花守に梅れい伝書す

△追悼懐旧

百日を追悼ちい一周忌ようを懐旧と之り白乃
歌詠文歌ように元哀梅乃表に伝て出
哀の詞を作むとする時い初て筆情に安也る事も
あむそい歌乃のも詞てるい卑劣ろうを
只光の白の梅そ生る故毎に余情所て為に表む
すりにあるう俳雲乃の白ようを乃　秋に秋の梅
付ろいすさるを秋雲乃を元虫て五ようさるれ虫
雲悲之元仏の乃にかるおい秋之裏光病死にかるお
い云乃に文中白牌い雲乃戒名い秋香焼い雲お
といふ梅ある事あれて法白の傍に秋雲乃の下
をさす懐古歌辞愛故に悲雲梅秋れい五にかて
もう又形容のおい平を人す

雅号　れの花も母おき有そ汚き　義
キて　香情弥ろいう秋の義　キ角

木白い所内白衣を着る指を和花と比て蓼寺の雪
をいとるを宗の挿花の姿と[illegible]して香の大法と為て慈教
の義を知する指を表てう掛一句の仕立云々
矢亭丑の春故師匠云の座おこて

一　指この手石生す生すさて〜〜る　羽
さち乃日　ふく寒う寒四く　拾九
花と指こらの手石生す手机上と法者を抽する姿と足
てお出張る畳と入て永るも意こう指を射こう
「房る候う永の節を宗私と
印　あおむさんやお甲乃下の芙蓉　羽
力も　枯〜〜　素乃秋子　亨子
あおむさんやお秋友お弟は海の多子入れい徒も
風こちゝめる枯木の力も房て宗文を抽て討死の気
を文素の枯葉と蓋の哀を云〜〜う
ミ、　竹松はき竹とや法も云半院　芙二
渓秋坊　うすしの果乃西こいる月　地峯

祭殺　さうひちぬちれそやむもなる利も　二
山ちとくき竹　谷うその花　ソち
さうひの花まちる宗文て山竹の多く竹山竹多
のちも屋くと文圏を文て一谷の芋花を時〜う
吊牧壺　芋乃宝こ生てるや悔が寸方　二
梅の加〜　極。乐乃乃　東敦
とその色や松こ低る。芋席　二
裏文物　衣物こ狩す。袖のそる石　芳因
花の表毛乃ふ花文よ麻衣　二
悼十丈　豹多の多も〜いる〜木法　地角
こ八乃・とき悼あれも白猫とこも宝ん云乃の
歌を金陸こ足セ白西共平さこ仕立てゝり
地悠吹　七枝やりふ一之こ。仏の社　二
金衣の声こ。花の宝ふる　芳呂
宗金草多こ金衣のめ抜を至正元の天芋ふる
件を付れも准おれい枝こあ〜尺

歎息　花うの名乃移るやむの白だくに　生二
　　れうの声の　千里　号　間多
　　十三枝い京ゝ東う文余陵　二
　　木のそうせれの花西の裏月　山リン
　　文実三ツ文梅い西ゝ移りく　二
　　枝ゝ国扇ゝ詩あ寿あ　八宗
　　花セをる苔の下落ゝ世ゝ　哲夫
　　ゆるの声ュ三ゝの者ゝ　二
　　梅も十三ゝの　移ゝ　千那
　　大梯のもも　ときき冬枯　角上
　　幻乃一ゝ　枯尾も　茨生
　　ちりゝと　ゝけする　宮中
　　代乃の傘いろきゝて花　八十
　　ゝるも　次も　移るやう木　一州
　　梅ゝる迷もあ乃の枝ゝ　文州
　　一字の移ゝ月も千金　二
　　梅ュ母文の熟ュ梅ュ千金を荷て一字の改ュ郭

告南書
惜月子
東山
義士高
三平
風高

伊を仮て去青一別の古詩を文ゝゝる西吾ゝ
　　唤孫の手ゝの恋や今の愛妻　百里
　　閑あゝ門の移る月　青　二
　　ゝるゝや花もゝゝちも　音平
　　山も紙を笑ゝす　青　二
　　号や吉翁風牡のうち　移風
　　ゝゝ木の笑ゝ　ヤハ
　　大伴徐の号もあけ三十ゝとセ　老陳
　　ゝきゝいゝゝを　牡
　　ゝゝ枝や井枝ュかゝる　蕉条　支考
　　地面の石も　秋の風　作化
　　梅ゝの数移るや　古今移　丁牧
　　てゝゝ　移るゝものを　比淮
　　伊や天ゝ星地ュ梅　花　笑欣
　　ゝ年の梅ゝの酒西る風　拙夷
　　梅の花や一月ゝて梅。仏　花フ
　　ゆるとゝゝ多も武　附　百ア

八宗
日
白翁
義仲寺
文星
甚三郎

机　文ちゑのおや彼を留る丁　市庫
月ひとりを惜む去のよ　加涼
ものも今の保ものの後ものゝ　手載
枕　枕ゝ折く　月の葉戸　角
夜　夜半の泊見ぐとや土筆　涼
ま　ひろゆをきの一番ゝ蕗く　哉
ものもろぶ命ゝ氏陰や白日　朱忠
命ものの光　命ものの月　朱宇
竹秋　俳角庫
名ゝ立ち鳥の寄きゝ夜花ゝ　一宇
ちんぶんのまゝ月あきの月　繁成
月ゝ夜俳交ゝ　やゝ山　和英
名のゝ壺中ゝ移る葉の色　十知
信義の百ゝろ　やゝ名の月　冬那
出ゝ立て　寄きゝ　楮　北
僧　寄や月ゝ仮名ゝ孤の声　伯的
芭蕉三七回　寄をゝ名の清つきゝ名ゝ　貴郁
冬ゝ名ゝ　ゝ人の名ゝ角ゝ夏歌名　ヤハ

降ゝ雪ゝ名ゝ　苔蹄
初ゝ雪ゝ　笑閣
みの　ヤハ庫　雨ゝ名ゝ　ゝ名ゝ　枝　梅樹
五十日さゝ名ゝ　ゝ年の花　風之
ちゝ名ゝ　ゝ仁名の花子　梅笠
青ゝ名ゝ　ゝ日ゝ名ゝ　梅笠
ゝ名ゝ　ゝ名ゝ　白川
化葉ゝ作る遠善ハ数句多れハ歌き中の句氏句面
数ゝ作ゝ白毎ゝ数河ゝ　ハ初て作初の句ハ
遠善

遠善を立て手長豚供書ふとまるもにき句の句ハ
同一芭を中比ゝ　句ハ長ゝ句ゝ中を記て
姥ゝ氏ゝ名の名ゝ名ゝ　句ゝ名ゝ句を付て
句記ゝ遠善を実位と又て丈ゝ対て懐古高の句を
付ゝ名ゝ句ゝ句ゝ名ゝ　丈ゝ名の句に句
間ゝ名ゝ句代名ゝ名ゝ　句ゝ名ゝ句ゝ句

香椎　去もやくりき調ふ月と物　義
十九内　門のされしーの乃の古苔　除風

古池や蛙飛こむ水の音
宮のあるりゝ月の猶　歩　雪

時雨声横くもふやあの上
くもりゝ除しーまの赤くゝ　生

狐もともに吹るゝ水ゆゝ
山の吐方ゝ　独秋月　風

陰の生るひあれまのくゝ
払ゝとすゝ陰るもの中　舎荘

八月
先人五条
十内

星ゝ祈ると合する　秋ゆ　嵐雪
机の手碗ゝ酒之る　指　ヤハ

雑あくや教の捨子の英浅　仙化
素拙の笠ゝ往来の至　ハ

松島や鶴も見なれぬ時雨　ソラ
月西拙とさゝられの素　ハ

星やまゝ陰乃　二見声　正秀

拙乃花ゝ　おろす立　白　洒堂
三日月や星ゝ　ゝる　猿　イ拙
雨のまあゝ　ゝは　山の花　西

我なよふ声や浮世の行時雨　ヤハ
みの
花節句ゝ　たの神参地　ふ陽

六花中の此ゝ　追善老ゝ　ゝ人の独
陽地を道ゝ　ゝ時雨ゝ　ゝ伴と図ゝ

六花　初雪や水仙のもの捉む　義
五十内　拙ゝ　ゝをふふ家美　ふ水
六内

市人ゝゝ　ゝ実む笠の雪
乃町を　羽衣大石　巴静

笠　冥土より出軍出ゝ　ゝの山　芭二
十七内　ちる名ゝ打すゝ花ゝ　ちる　龍入

大友の乱美弦の疑大塔宮の伏申と思ふ古舞の
哀よりも出ゝ乱大花ちる　ちゝ　我も今の花紫
のちる名ゝ　ゝ乃ゝと其山の設ゝ　ゝ

秋之部　今は押分見ゆる柳かな　翁
待せて住き　古乃也庵　山幸
寛永二葉大般の書之数ニ挿絵在仕是ヲ丈比よりの
名はやされども谷小指の子く郭と多なくてめでたし
△古人の句　是も常体之　多伊者
月ぅ柄をさしてくれよと扇かな　宗鑑
あち　板のきるゑきり夜の秋の底　鉄人
△文通　弁留之
文通句の挿画之へ挨拶句の挿むも常体ざるを
金比丈丈と定める意を作ていふ事も有る事
まつみりし是も挿い句柄のおと写真するまま起るひとく
翁此比すら川は是すと申て中きき
裏　面きれて栗の花さく記見かな　桃宵
何れの葉そ～鳴る蝉　写雅
只栗ある柿の面されの形崇を付へり
あら　麦を忘れ花はおかれぬ一念　ソ堂

手をうさしてる冬の降哉　や水
或文人の事偽て序文を云人先き談夜も此ご下
引出しられとも只数丁を見返る体をもて見よ
△述懐　いろ花おおありたる老体之
名をえり人も年よれ祈しられ　翁
独も仕付ける麦のあき出　許六
匂　出ふとるあて秋の葉散しぬ　翁
梅をさびしき茄子一本　卅行
出　此ゐや也く人みしは秋の暮　翁
艾使　此の畑見木ころる鶯　係足
△名所
何所を方むきの月みなし　寸木
一　あれ似りし三股の舟　翁
山下　よしひく名のうえりてよ夜の山　万子
風の夜を一夕と出ても独　巴爸
衛　星清の閑を見よとや高く閑　翁
舟漕ある　あまの煙火　寄花

越
二上や雪化粧のむらさけ　桂白
嫁入りおくる川舟あまたく。　支考
發句に同じ名所を語ても又語さるもあり
笠
春風や麦の中ゆく水の音　木導
牧田川
踏ぞいさむ花の朶白　翁
越
卯の花乃初音待ぬ時鳥　老
卯花山
ひるさく空にある時鳥　温古
發句に名所の隠るゝ様に其名所を發する事決てなし
因玄玉表物の様は様に何を付るよし只様限にておく
物の元一句とする物は仮令なるに神尺意旁名
所の名を含わても句面に顕るゝ詞あき時は様に
其句を付發するなきものて無也其姿先勝後乃
数くを此表物の様をえるてなるに含あるを付發
するよしと思る人あり　過則勿憚改
△頭發句　様は趣意に拘る事なし
仲秋雨懐故人

桃白
名月や笹ふく風の音を待　任子
家に枕のさらぬむしの音　翁
ぬるに枕たゝえは起出て面をれさまで　此方錦付之
梅十詠
仙化待
八重うさく素倉も梅は一重かな　梅光
菜も小便うらへぬ鶯　其三
一仁
生在も何ともいはれ梅花　七面
羽てらしけめ鶯乃声　二
一佐
垣根も静うらすや——　ね雅
人のひろねをおこす鶯　二
喜寅詠
旅袖に恙やく梅の老木かな　桃川
笛うまふ足乃鶯のたて　二
冷情
洞夜も山家の深乃陰梅ろふ　有梁
声は都そらぬ鶯の日分　二
仙洲池
悪からう育て梅の白さらふ　川鶯
鶯も其子に母のやぶ入　二
徳川
闇さらぬ月にえまや梅花　里人
表作すとて鶯の籠　二

花さくや庭をひく梅の匂ふ　呂杵
素堂のさひしもさすらふ　五二

椿分乃衣裏〻〻や梅花　仲志
笠よ柔〻交るまの子　二

変化、

梅花さくやのめよ小刀　伯楓
ふかり〻ちりくら篠子　二

俳式、

△ロ季

古池や蛙飛こむ水の音　芭
一　世間の美をまとる陸乃巣　き角
原〻さの瀬伴るる水車　信風
青蛙等を見おす名月　芭
根本

あれくて来いあくぜ分ぶ　猪牡
名　芭乃ひをあくる梅の枝　芭

あるく梅を梅村と定て字を国と足世分法心て後
孔をる鄙のさ上見るる風情を分る

秋白　風乃一日吹てをまるく　閑友
爲も交る里の麦畑　乙由

ゆ代一和仕立の白玉牡丹陽炎風を見出て海を渡る
ロキの鄙い七郎の注は麦くする加る家は拳す
炎天の□■□■ロロ下あるの最毒酒とせよ
九条曲脚中の白いまく炎熱を見宝て他よ忘れ
ぬ拾る布〻又一度布匂をする言い手柄〻 廿七集六句
る竹あるく竹を定竹あるの時言を分よ比あ者麦を
係て鄙る田沢高る杜畑寺を分る鄙とんぼるる
を麦暴おく又を比条乳の白る

杖ゐイむ　去乃　喉
えちく仏き月の門先

ゆ代条色る向て只見るは人を分る人あり是も好分の
古堅之今一切を原て社二句の白る見るいまもるめ
蕉門は只見る只きくは分炎拾る分合る
あきたるく

△雑

笑　かちあく杖実拾を為る　つ利
名示　角のとうくぬ牛もあるもの　上芳

宋史風　何と為く宋史く風も哀し　杉風
別　面のまれ月を牛抜こ面く　義
本面い送面のムさ山き情ゐを換音して宋あら情角
を足生　哀字を除めうう〜らでム面規ゐも〜で平
白ュ雲む生報揚の対方ム。國文　面の夕ュト写ュさう

△揚の容乃ゐぬ〜ぬ子

必校考　揚ハ力一ュん句面の余情を云付て対の子掬ゐくて
情ヨ〜を掬セむとする時ハ一ュ三の中ュ一ュ〜き面ム如

平安九カ仙

三ヒ　ムきュ子俗武松下ニ下リ

ゐる子　新日ゐきム竹格子　辰化
雑の乃矣をえれむま　去　玄来
雑又のゐ〜をれ出ま　去
袴又ねおりをとう生ム　去
いそ〜るも先信ム　去
ゆ〜ム次するきュよの風
小又そ〜ま地ゐる　去

傳ゐ掬ムとる山ゐ中ハあとかもしよきる
ゐもも〜みュ中ハく〜内新の後の面ュ
乃生やとゐくとくハイ男ゐ〜
小いそ〜ゐる　ムゐ面ゐ生ュ
ゆ〜ゐ〜と去ュ　コレヨリ新手

芸村日皮ハ去来いさゐ〜ゐき作去ゐ表ゐる揚かと
セむいいとハやゐるへきを自の係ュをゐ〜ゐてゐる和
のさュを乇ホゐ雑揚の子ュそ伝れ和もかゐやかと
捻ュされゐも和んセゐやゐむ「永老ゐ〜く
去の移ュと伝並山ュ内ハ〜ゐる　姚

◆祇義考ュ揚ハ附白才一のわと示乃ゐ宴校の面と
去来先を京ゐハ戸ハ何ゐるをて表ゐ〜伝式
六揚を考ゐュ情新のをハ〜き〜ゐ才ゐるゐ子
ゐと見ゐて今人何ゐセ面ゐセュ〜き

尾張ゐ蕉翁ュまゐ〜ゐる社人〜
阪ュの内ュむと舟ュ〜ゐるュ

海とまて色の声なのうゑ白し　翁
串よりちをあふる盃　相撲

本句は海に芋られと色の赤くホは目を止て行くえ
ゑ色の赤く波毎に伝く初秋の白きの反は見るも
未雪積ておるうゑんを声反ゑ白しと作るゑ曲長
されば反透又る色の海を定法岩波先ゑ
この作の風情もて自家の姿を形すべきを古潤を
あ出ゑれ対〜何も風子対ゑゑ初入門を翁の
改法をきゑぬれ〜翁もホ見奥きとそひ初対
あれ時宜ゑ許されむ対れも左化せゑ以表あり
されゑ撰集ゑいきゑ〜稽ゑ子ゑ見ゑ見ゑ
日付撰の冬日ゑかゑ方柄稽一もおきを又よ
某は反付の会撰を安永ゑ三国又は某年
号陸奥三万仙ゑて作ゑ稽ちあ〜翁の付ゑ古潤
の人も交れ弟ゑ〜ゑて会釈もおもむ今某ゑ
一回の世ゑ〜て吉家の訳鉦を門ゑ立べき付あれ〜

仮令翁の許ゑ子ゑも反遠あ已ゑ和枝ゑ
翁は反付の三ゑ子ゑ反享式を教ゑ〜ゑ子ゑ法ゑ
乳ゑの遠気ゑ〜ゑすや法君子ゑ〜ゑ

十七　明星や桐実如山ゑ〜　キ作五名

附ゑ母ゑ子ゑ〜ゑ法ゑ芋の新　去来
式ゑの桐ゑ子ゑ母ゑ〜ゑ山の仲間のゑ〜ゑ
遠ゑ〜ゑ不ゑゑ〜ゑ桐ゑ方柄を芋ゑ
ゑ晋子ゑ反享式を母ゑ人ゑ反ゑ門ゑ
面ゑ〜ゑ付ゑ〜ゑ翁の改法ゑ芋ゑ上ゑ
人ゑ〜ゑ古潤ゑ久ゑ〜ゑ刻ゑ上ゑ和ゑ伝法
ゑて見ゑ芋ゑ故ゑ芋ゑの法ゑ芋ゑ少ゑ言不
典君子所衛ゑ芋ゑ弟ゑ遠ゑ芋ゑ反享式ゑ

枯　隣ゑ芋ゑ桐人ゑ〜ゑ桐の花　芋ゑ二
ゑ〜ゑ隣の君ゑ〜ゑ千ゑ芋ゑ　ゑ和
本句ゑ金ゑ枯ゑ芋ゑ〜ゑ芋ゑ〜ゑ芋ゑ桐ゑ
ゑ句ゑ枯林下の隣店ゑ移動ゑ立代ゑ代ゑ

孫人の秋を分へむを拾俳の君とハおのおの分うそ子
卍号も孫字の位あるに効拙い知注一字もお白乃
客句一度子卍和 孫才三の遊ようて三お拾遊を
芽ぐる艾中ニ丑あ艾中の桂陣を翔す人い
おうて式号の假拙を禁ぐる徒の多くもむ艾号
門を度ていて陀ぐむ老い云まも詠ニすき
るあ底九古の名家ニ以るも白無ニ金ひ拵あい
本史の新別ニ付ぐるおを拵て世の遊とするひい
才子の位ニ只陀ぐるむまくよ底ニ宮あるニ考
猶ぐるい初て艾陀を辱むるニ似ぐるむ彼考子
の陣ニ秋の枝を夷ぐぐた夫ない枝不孝と称
ひくる所以をも忍合すへきるまニあむ
因ニ薬陀も花ニ考き舟秋又庵未の革代又「白の
立ぬ情句未の孫い一度底あ家ニ[illegible]気陀保
ニ出ぐむ位合知ぐきたもそも孫の対方ニ佶ぐる
おあれい家あるぬい孫の秋ぐ古ニ九孫一白の号ひ

一品ぐる所ぐきを初い平白ぐる海と信
まぐる新ニ化ぐる才のぐ以ぐ弔考ニ生を考ぐ
ぐ始位季孫三百を一月ぐ一次ニ俳参教三方を
又一月ぐ一艾次ニ革作三百を三月ぐ一孫ぐ
情句百を三月ニ成拙あぐ一むれて千孫八ケ
月の秋ぐ古ニ位合分白ニ一云下ニ微拙を記人
も孫ニおんてぐ式拙り地を絶ぐむ限い部仏
載初の境界ぐて丑ぐ考ぐむ

□才三の才

図才三の留ニ文字の定ぐる才ニ一句の拙ケ句のやうあれ
ぐる下の留ぬ不ニて本句ニあす次く及すきれこ
式位を考ぐ附い才字ニて字ぐる限すと考ぐされ
ぐる式句い才三の拙ニ乃句の中ニおくる拙ぐ拙
ニ才三の拙を考ぬ附いやぐ定ぐる留孫ぐ一
▲只ニ字ニて字ニ限ぬ位を初て白生を乃ニ考ニ
我い才三の作拙を初ぐれい定ぐる留ニて麻すと考

只そ仮令て面はても才之仕事ぬ白い必ずは
きるゑ依を世ゆ作ゑ才之面すと白を熟する
人あゝ大ある以ゑ面字片句の孤はおく字片ゑ
そ作ゑい必面ぬ振さかきて作るゑそゑ
世は白字面り仕掛あゝて或い和橋時ゑゑと或て
押字抱字のさゝあるゑい考め人の振ゑ之
▲コハ古式の俳之仕言ゑて面るを其比句字面
云ゑゑ古法は白揺仮名面仕の時い才之句
字面ゑゑるをそい古式もよく考め人
振ゑゑと俳せれゝゑまて其流て

連斉 逢我独吟
月あゝ毛あの白ゑの空
雲流ゑゝ夫る去の厂ら寄
去家ある波を松の作舟
祝仕和橋千句
さか振のそゝろやひの宗の内
紙を巻さる 新乃 号
去のまゝ天下ゑ名ある時ゑ

昔の連歌元かれいまて我家の他仕ゑて
辞面仕云面仕白揺る其成いゑ只其法の
越ゑ仕て仕面ゑ七ゑゑゑるゑ之比其昔の
字法ゑ引出て白揺辞法の付い才之必仕字面と
宗又其字面七ひゑ上五字の孤ゑて字ゑ字を
入新仕て面ゑ面ゑあるゑ仕七ゑ片行後
いゑゝ後を仕云ゑ孤ゑる白の新仕る慣いあ連
陽もまゑ宗ゝぬ時面仕ゑ其時ら氣も仕才之
ありしを一法を持て仕ゑ仕を仕ゑ仕和白と
平白ゑゑ法い仕才之の白字ゑゑも考ゑゝ
ゑゑゝ其ゑの面ゑて面ゑ必ゑゝ之ゑゑ
▲才之限ゑて面ゑ面の白い法法白係て付ゑき
わゑゑれい其ゑの面ゝん仕乃矣ゑる面い其落
新ゑゑゑて用ゑきゑゑて

宝 幸さきの松花より撫ゑて
仕ゑ白の居ゑを考ゑ付い新白ゑ才之ゑ平白ゑみ

見おきたる本句ハ一句の中に曲といふ字なく
此句に花ハ曲にして松の縁ハなく
▲うきさきの松の縁を詠せむとて此句の花を捨て
一句を作る者ハ最曲中の也
才之　手摺の松ハ去の秋縁にて
是ハ才之の句く此句花の一字を抜きれハ本句より
執く松の縁に至りて平句より他き事を考へし
▲月秋の松作の去りきを縁と見る事ハ不言之
平句　かくさきの松を去の秋之反て
是ハ只去の行きのくありハ曲なく言下なく此の平句之
▲平句ハ八平生件ある此の句にてすて執る雅俗に
拘ず只其の處ある作をなりて發る仏の見ぬ事ハ其
の作者ハ平句之拍子の事ハ出来其拍子の上に
作る文之言之一作ときれを才之の作を考へて
[画]才之の姿を考る時ハいまた字なくても才之ハ
留るく情て句字留ハふくも及ます　上下略

[才之]才之一作あて去るく集るへし　何れも庭分く
付所をそていふ事て留まるむ留なと多くする
事ハ只頭の留るやうにて於のつから句目の付
出る段にせむあて字留も留とても留字て似
句目を付すへきハ何留にて縁ある一し　文約
▲今才之を言に作法さまいふなれ大凡二通
小割ハ留之かく名目を立るハ留かくしめむ為之
○卍作　△人丸　△天狗自巳　△自巳天狗　△夕千人
○不角作　△上五去　△上中五七　△中七去　△下五去
凡此等の法にて作る時ハ一言付て句を平句に定むる
之きおよ何留ハ何辞をいろいろ言ふ又さまの辞なと
いふ事あるハ古式を守作る者之甚つまハ言作と
次ハ及ず上二条のおに数なし・やらむも・なし・今作字
何留にても符合あるなハ才之平句に作す詞に
述るも考へり多家にハ辞の係詰をもて才之
とせす留の文字に拘す一作あるおを社才三とすなれ

其中に面白く正格其余の面白き除て変格の
世話人家に集る八名の中△足立は名い秋いちく其中に
教作あれども多くハ知らむと足立に集られた
法句を考て自分セよ「△平句に作出る下く
△足立
拾
拾うの奥のんも孝兵衛 義
——ほうの中——
とふべきを稿の俳の悟境に対して奥に此句を示す
一 野辺も秋の月の里を見るて、
——きれい
月見に子つきを名不のちく作る不作者
義 七夕の八日もおのさいくて、
——を二一対て
発句弁 教の子の水あさうる程来て 仲六
却九日 ——を洗う水の——おとする
十人う十人と虫字抜て遊玄あられとも世月
氏味を考ず同るを名つる社口をいれ

宗作 下秋の蓮は一茶 思く紅初て、
翌九日者この句を付べきれ寄字を抜るく氏貴
三の胃れい寄字にて是字脱くに
——の沢うちの——は地く
寄 教人の子に大名の萩さきて 文考
——も——もくて
大名の萩屋ぞうに成て故名の屋敷うく降ぐう
衣後寄作さ〳〵五氏の子と見寸氏紙も
秋大名の下屋敷に咲ぐう拾よ位を付ぐう
、 義人の子に解うう萩咲て、
——もちの末て
陶のむくの折来る雪の間歌て彼に不泊て萩のも
を四舎りとひもし解ぐる附い地名ト八
作者のちく作に一陸付てえメりちとうり
西花 氏秋を宮殿法陸寄れて、
——斉まて
ろう月と秋を解ぐうるを困ぐうと奥寄足立

西花　夕顔の小歌もかなく今人恵さかて　支考
　　をちこちえ反て
、　笠きこと笠きぬ人の逢さて　、
　　引ひ人と　不の
　　や是者と注為のる俤掃生て　、
　　迷
　　他世い是弁の戸口なくて　、
　　式をまりて
市両　百姓をきらふ子供の為れ　ヤハ
　　為ますきする
小弓　我拙笑ふ小歌知る人あくて　無住
　　法ひやす
白加　山里いこんあく　まく考和て　小枝
　　不きこ　こ　こ
秋登　跡を　を目鼻もつ手おを　牧童
　　あと生るあく
東山　り列をむろでの笠の古家ゑて　立村
　　の引つくらく

、　月如水数ゑあふく舞多年て　月口
　　子殺く
　　陝を乞時いろ有ゑ　ゑ和を付て　之仲
　　一斤ゑ　ゑ　向て
　　商人の袴を見る陸のえて　敗白
　　似乱あて
ツタモ　唐おりも今の紙衣と又被て　六択
　　扶くて
東花　仮茨のこ尸な小袖のあれわて　万戸
　　のそき
、　化さそと皇子の居衣是出りて　不実
　　をとろむと
シ、　去の日孔山の所の一の路えて　知角
　　ろるそき
、　入月と生る日と山ゑ舞多年て　山リン
　　向合て
かも　もそこやも歩きぬ猪ゑ泊是て　正位
　　会入て

三匹　町並の古ても一軒蔵の抜て　乙由
明ておて
山下　茸狩の拔ハ門灯け被て　為由
まつきりへり切て
ヤワ　古ちらあちら揺の長字まて　秋坊
又夜寸
斉　徒りを拔の大徳にあつめて　左角
中まて
去良　蘇入の弛芝に種蒔させて　り和
只手
松　小笠原ちと見ぬ浅々とて　三升
娟こせて
、　村百の室を読うときぬきて　阿的
法うちにおそれて
、　踊子のおく子時も粧にかて　亀町
並おて
三お　団扇売の京を笠に見て　有琴
京の京より出て来て

、　全の生るみつむの梢冬待て　蒼及
篁とつく　きー
、　小荷続より脇ハ垂荷の真蒔て　築孫
ろようも　ちつき
、　高木屋の山おそに白ん仮ひて　守歴
家派ひて
渭　波うつも松に霞の上荒て　固秋
つとうある　たまりて
、　千金の春を羽木の姿まくて　立和
まさし入て
小文　互ふやの門を餅に出代て　李里
内そう育
枯　ろ時の色てきひしき牧の柱に　翁
ハ席とられしあそのーさしひて
黙白　所灯のおよりきつむ海山に　文芽
防るあとうしよの明て
拾篁て出されいろのられりに　支考
見よまに

本六　「去年とてまたきりへて啼よ　湫喧
「――とんのうつりもれい――
是身　千金も捨て一句の道を遂く　巳性
之　別るゝさびしい――
あち/ちり　唐籠誰か琵琶にめてつらむ　二狗
「――り文なる名を付て
拾　世く翔いく夜あるの淋しくらむ　の英
「――ととめる――
壺扶　帰よせて作る雪をや囲ふらむ　旅通
つらく希る雪を行へに帰よせて
随　「孝萩は庭のとりんのむすふらむ　千梅
「――外ものは作なりて
小弓　「抹金と中を連なく傑なむ　东推
「――のなきあいたに――
冬　花蘇る骨の露に咲くえり　卜ゆ
用言　「――肥――
白旅　「舟の浪に余念のまうともなし。　信化
を忘りり

史證　「雲をふく室には古れ庭もなし。　好像
「――まくとおもれて――
戯　去はあと実きる人もなし。　悠白
「の人は形なりをなりて
、　此松にそて月さる枝もなし　竹堂
「――面白うぬ――
[氏下出]もなし苗は本句は発はあるに角もなしと去に
中すを本句のもなしと定ては半に角もなしと
静しきるんそて定之のもなし之
[本傳]本句の定は是に作る発は半に角もなし法すく
定之のもなしは実に作る発はあるに角もなしなし
▲去氏二翁の伝とあれと古伝之三戸と本とに此外
もうろ人の事あり甚ついはる偏固の説なき
る事懐白に実の事を入るゝを又に又もなしを
古来辞とも称れと此そのもなしは用言之
ひさ　「此角たのりやくに作し去の堂　琢石
作云　――声なるまなく――

〈天路を作るときを自己すて作意を対する俳

拾　子の負儀夜中く眺――て　子鶴
――そろ――人あって
夕夫完人の目ゑ門ゑる来信も月花の眺ゑ
拾ゑ〜むく自己の考を拾ゑる不信く
七十　門ゑんの拾色ゑかまむ月を人て
――れむゑる去のお明て
共　号を三ゑ塗ゑ追生――て　五芽
――の――それりて
三夫　村雲ゑ月のきりむきれるゑて　伯忘
――光をさくれて
東花　新ゑく花拾い俗ゑ紀れて　斜眠
明ゑ〜くまゑ花拾の眺ゑ
東二　蕪俗をさを明ゑ来て　ゑ考
――ゑ――ゑて
五衣　ある時ゑ尾花ゑ杖も清れて
ゑゑて〜く――も――

笠　殺の後出め徒りゑ門ゑセて
――を考出て
越　殺花の二ゑを拾ゑ殺て
――ゑ河きゑ――ゑ似て
、　拾ゑも武り杖をゑゑて　兵ゑ
――きむゑも
望月　去の四くゑ乃ゑゑと園君て　冶天
――宝セきちの時むゑむ
八夕　殺ゑあゑゑと月の空ゑ落て　宇中
ゑ月の明ゑる考おく――
山下　杖風ゑ地中ゑ考ゑれて　兵通
――の――吹君て
フリ　あの山乃拾を見ゑと月出て　村女
――ゑ――ゑ――
反考　ん病をさゑセい追ゑ萩咲て　郁七
――の内ゑ――
秋風　殺拾ゑ柴ゑ殺仕を見ゑセて　杜蔓
――を――の巳来て

名匿　寄るべき日を待つ月の待つまで　守栄
「――ユ――さ――出て
柿本　雲あり我も老ぬ老ぬ　花ゆ
四ちりぬ空ゆ――の――
僧　やふ入の近ゆ寺ゆ鶯鳴て　履掛
「――を――川ゆて
三和　乙鳥の巣を寄るユ寄られて　杉丈
「――い――のすゆ鶯て
雲雀あく日あも焼んコ　巴蕉
「――ろゆ――花ゆ
ま　ひちりきの穴ゆ杖い国ゆ――む　牧童
タリ　「――ゆユ人を――ゆ杖文て
ちむ
思ふ　庵の角紙のゆゆ――ゆめむ　馬移
「――ゆく――
和歌　秋彦。待ぬ月に出ゆ月　義
「ゆ――ゆ――ゆ――ゆ月出て
冬　楼松。山家乃作を木のそゆる　文五
用云　「――ちゆユ山家の作――えて

和歌　ちゆ――ゆ――ゆ――ゆ――出――　牧童
「――ユ――ゆ――ゆ――ゆ――ゆ――
△自己ゆ作ゆきを天然ゆ――ゆ――ゆ――ゆ――

サル　股引の形をしぬぐ川紙て　凡北
寒花　寒花の花やぐ花の実ゆて　不正
夕コ　花の実ゆと夕コの花りて　格局
ひさ　花弟の風やむ後ニ軸老て　格局
　——ニ懐を　払——
　引抜——ぬい抜把の斤方ニて　ヤ水
　手ふなひえのにへニ引抜て
冬固　ひえの穀とまる雪うきて　孝伝
　——を雪うるうきの石い止れて
ニ十　砂川ニ走こすお金のかもむきて　書小
　——を——けて
反考　接典の冷る机を押やりて　支考
　——れい机——
亨　やふ入の地走ニ門の萩咲て
　——、——ミヤて
朱西　反舟性ニ人ゆる人待て、
　ち——

雅　今をうりて反さぬ寄もれて　侯石
　——ると乃とるもむく——
朱花　家根萩の三の枝抜るゆもれて　蓬仁
　——ゆうもるとうの枝て
、　まふ性乃をてに欠ニよの文て　觚浪
　——ニよのの文りい欠——て
反衣　出正のめ行抜一寿袴長て　野古
　——ニ——おヤ——
渭　花ニゆく名立い樹の雪虎て　之仲
　——白き髪利て
三あ　そむのこ衣性虎の虎をあてうて　表推
　——を——方ニ行口人て
、　ま末の和弟ニ抜も抜出て　玄殺
　——ゆを——ゆを——
、　明ゆる見も曲性い抜中ニて　仙枝
　表明ゆも考ま——ニうれゆて
　帽子の下ニ裕の枕い来て　嵐青
　——ニ裕ゆる——の——

文室　曙い出山の裏よ吳今れて　壹平
　　埋も山も去の際――
　　ときの声雲と山風吹こゝ　治六
コハ　――――――

めふ等もあり。と設難しいふる不作云く

西花　もゝ〜の笑きて居るなり。　支考

笑きれおを笑きさと云を云て作て言を付

とり日者の拙字変態あれども作云く

本出　時もまく字てめ明支　芭

竹堂十月の頃又之無辛とらふ一きを時るのも

字て頃て又とり「注」もトいく手句あむ

柳　柳の木て考ふく扁を仮枕　涼ト

柳侍て考ふく宿を比和尊て人の来を拭う

東山　さを乱たるく云ぬ蒲衣　雅之

う〜衣きて別て比うをさとう〜

東五　ゆう〜て尊も冷も枕動も　支考

見を清浮物伝の法とび注する時い者之の二留く

又塞辛の法もいへきや書も注も枕動もと云て

結法て云他字を取す文法い竹堂てあり寒て

いもむ文法も句格も侍て物寿を好むあ

らて其句其字の用云用あれい為て学へき法

格の用うて学て見へきい句作の云用あむ嫌

▲文法句格ハて作る句い侍者て作ゝ見上の中ても文作

例多ゝれども文法といて初心の雅き子と為ども

とお目を立寸保一至てう者てあ〜でも老中

云句多きいを拙者い者て作の云用を省へき子て

あす

△上五云て不用の用法を入る例

不用の用ハ云句て法て入用あ子ても一句の上て

最有用の云て氏初ある時い一句言間て字也る作

きいふて云句ても一句の上ても云用の法てあ寸

字作　阿弥て拙句の外乃枕ぬけて　芭

許六白芙蓉て阿笑為る氏い外の勢注〜ハり

カレマ　月我日涌ふき云て振材て、

芭　雲の穴病を来て戸を明て、

ハハメ　月て角力て袴仮抜て、

除　衣うの材いるあ云りて、

雑
たつ手の所をそれ向つけて　キ角
一　新宮ゝ先ゝろ田衣を引もうて　トロ
奈六　藁の手ニ十里ほどゝ川越て　大り
小弓　京へ出く水苗代ニせき止て　奈楽
三和　松風の庭ニ面を二十立て　一空
間　白雲の色ゝる反ニ落葉て　拾ひ
貢　ゝ　ゝ　ゝ

ひさ　たひ人の風きせく去られて　出翠
芦川　芦の葉ふれる西く夜　支考
西冬　降らせて雲に影の寒る寒て
白ろ　宗の大徒ふとんは仏さまて
ニ、　状ちんもいらぬ仮寝の下帷て　芝二
東花　くるのセあ一殺一月出て　一体
山中　ミそあ〳〵一石もうゑ　花水
ヤワ　時をあ〳〵てるの住もて　夕市
む橋　てるのすきろはもう　稲川て　徳也
三和　夜連る振て市の年きて　蓬徒
竹秋　り行の出ぬ月もさむて　左俵
柳　商振の住もあ麻的て　万り
、　五月の月て明やさく〳〵む　南村
東冬　蓼川の車に我意を〳〵む　及朱
弱　一度いねもセで落の眠り　乙秋
東山　一度ひろと定て世く月　木因

試写九十九りて歌付こう上中ニ不用の用法
を入る序者ニ写一あ引の山寺の尾花出中ニ出
き歌を独ねひる振の足西るを一迄あく人行連
てたゝぬ詞を切る振ある作を寄事ある也

△中七云

玉光　さし歌踊ニ急く布橋て　羽
你　青の月くれるあニ者て　、
芳　姫生振かゝんきの角ふて　去来
雲　さひ人も一歩る時ニ茅秋て　支考
少文　程度変山を後ニ去られて　山店
寄　かる附も極る時より田ニ植て　乙由
間　一家い夜を解ニ布おりて　麦川
ある　よの中初日のうの去来ニて　二川
友　見うよい茅ちの日ニ行きて　去来
梅山　馬絨殺去のわとて白めて　り由
白之　糸立て野広ニ寄る定そくらむ　山樣

八考 篇毋丑ヨ吸する ちりもなし。 行る
見景 振る 門も 振の袖と 麻衣 何声

〈下五云

一 清水出る 清の小芽ヨ 杖立て 翁
伽 初月の 月出 緑ヨ たくらして 青白
白鳥 出刀ヨ お代の 笠持 鹿来て 文考
西巷 天宮 さるまゝヨ 笠及の ろとて 、
三お 恨 恨の 久い 指ヨ 苗 云て 左把
、 そろと 翻する 青ヨ 月を見て 九張
赤花 小信ヨ 独ヨの 上ヨ 森 勢て 青川
、 井戸 及う 田の ますれ 笠 抜て 風浮
拓 献立も 陶 変 あれ 月すて 山リン
菫 田ヨ 回る 代ヨ 幸の。 あるうヨ 相変
死九 人見の 天宮 冥 ヨ。 去 凡ヨ 去来
対 及ヨの 日ヨ くかる。 新 青ヨ 、
八考 目代の 及 数 地 るき。 青月ヨ 吹 変

サ九 物 毋く 教 あり し ヨる。 月 月ヨ ヤ 水

サ七葉 ヨ 留い 月 月ヨ 青 孟 る 物 毋 ん ヨ 偽 白 作る 之

▲ 巳 云 非 ヨ 留ヨい 物 偽 白 云 原 もあり 巳 五 八 皆 云 原

あるヨ 又下中上と 及る 事ハ 及 浅 も 示 文 及 ヨも

きえあて 示きるく 凡 偽 白 い上 五 中 七 み 浅 ヨ

巳 巳 云 を 入る おく 偽 云 物 毋 教 ヨ し ヨ 月 月ヨ 巳

片ハ 月 月ヨ 物 毋 教 ヨし ヨ り ト 及り 「教 ヨ 月 月」 物

ら き 茄 月 月ヨ 巳 片ハ 月 月ヨ 物 き 流 教 ヨ

月 月ト 及る ヨ 巳 五 偽 ヨ ある の る き 示 の ヨく 体 云

ヨ 偽く 辞 ある 事い 決て 慈 偽 する ヨ 事

青白 魁て 母 衣 武 志 一 殘 嘉 ちむ 昊 天

ヨお 孫 悔 子ヨ 被ヨ 笠ヨ 自 子 考 君 仲

十七 翁 殺 ヨ 陸 乃 ヨは 乃 七 云 来 新 水

□教留の不白ヨ考ヨ ヨて留 不苦

宮 教留の不白ヨ考ヨ ヨて留 セ ぬ 事と 人ヨ 知 付れ

とお 言い又 ヨ ヨう 偽 ぶ 地 偽 定 の ぶ ヨ

ユて年留ふれユあくたらいぶあとくふ足立ホ句ユ
移ユんのふ多ゑ〜ウ人分てユて留あるユ〜

▲只秘出要決の云く哥よう哥ユ云ユこの名目を
分られも哥只は詞歌詞ユて用云よう稽くト体
云ようう稽くト二条く宴ユ云伯定卿も皆体
つきのふそて見おゐあ〜又ユてい上の中を下へ
云云る詞あれい哥ユ云伯拾遺ユて文ユ云の
連ふれあ〜要決い哥の哥のさうあぬる者を挙る
彼伯定ト云おるるふの説句ユて明之

みの

木のトいけも殺そさ〜ふ 哥
明く末る人い物る表 風麦
恋恋を重ねる程の情ユて 言葉

哥

只夏の枯独を見る月ふ 伯木
人ホと〜ユ 時句ウ〜ソ重
哥の多い人の孔ある言セて 伯拾
月も候月もさく葉の山路ふ 司雄

哥ユくめて 伯も考る 草三
才ホて宮の布ホ多ふて 友憲

□三お

合歓 文芸日葉巳の花句ユ古より三おとゆるあり
三才和合するんく

▲三おの花古来より多く平ユ武蔵と種ユは
〔ヒヨウキ〕 哥花句の口三句八出る哥ユ葉巳ユ
おの手柄あ〜たとくいふなのきふくゆるふて
巳三句ユ白句千句の話をもちるく 文鳩

▲又ユ塾向句作ホ除くカを入ユとゆるく世ユ
云古〜くおユ孔合ユて巳云句ユて物をとる論
あ〜芸より人句のユおあて調ふ生とも俗の
三おユかふるいを特あれい密ユ号ふべき事く

ぬけて秀の孔ちる古刀の一ふ切 古長
移つ矢の根ユ伝き 枕風 定能
片〜きふいさ事〜序ユ仰て 哥

コハ近宮の作と菊房て云おの格を立ひらる事を考へあれと実之生事

菊

及不二や五月時雨二月の花　ゆを
花さくけもさうをしる　雪店
雪ちる子社宮巻之爪の宿て　菊

コノハ
元禄七
五月

まさ五や蜜柴之止る神矢の根　許六
石蔵乃中一之　解　本竹寺
鉢りく斗の田鶴のうけひて　朱独

大会の水のひ幸やきそ　拍り由
うし来　配る六人の初や　六
本麦ら主田之博や脱らむ　黄逸
付表の家社一字や事　拍
さ〜波めるむ弁才天　鯉　独
平博の屯之まの花見えて　由
初宝や大んる不二の雪　独
春のふうを作る門松　徐才
完頌おふ祝う蜻みのあるる　六

大福の茶い越おの拍し　才
和花　春之れむ孝仁の文　逸
三月之実の足拍是うして　等

菊曰春根の芽お芽之のつとう世上の人を俳侮ま
勇件あるれ月後の武者のまつ　ま
ヘンウキ　元禄十　三月

佐の字之声　多字は　ふの去　由
ふ〜〜くうあす　青の時　独
乃合芳の跟の沼も雪佐て　六

野山　大家云ん　まと

ま〜〜とや王苗ふ　ふの門　キ角
ま之のふ年ふ　ま庭の下茨　支リン
家ま　のをまく家の月時て　キ風
原春い木のうれ　早ろ　ま〜ぶ　、
小れの拍ま　めるま山　角
ふ木人之ふとふ家抵俳ふむ　リ
芝苔苗　衰之ま　の是ま　、
歌の投き　行茅ふる声　風
橋井う松を系之ふひれて　角

山コト
陸奥
俊重

成経

[illegible]

[illegible]

文直上略

[illegible]

[illegible]

▲掛を能乎仏の寄と又立偈の文句をたち入こうまき式文通寄二平いく答ル

□六句表

冬　フいろ足とつまあ牛さうあれ　西行
、　桂実うあるる枯木乃松　カケ
ア木枯川ふ志ニ髪を乗能て　平五
、　捨宮う宮をやつすれ秀　トヨ
○白うゆニ除ネ乎月の内　菊
花ニもをすうる波草山　ヤ水
是表ニ地名を出さる始之偈ニ平化門紀活ニ多

□年式十句表

[illegible]　表ないすう句の大数うて表ニ世ニあるる
ゆを題す仏神祇の不句ニ神祇の掛状述懐哀
まの不句も右ニ同一花の不句ニ春ニ神祇月
ニ恋花ニ釈ホを附の宜ニ足合つてうく
フ松杉ニすんひとうこ夷ゆ　去来
、　うゆ面白う酒るたそうれ　許六

コ印　ひとすんこれもちろん　ぜんぜおりもの　ものの　ものの　もの

ものあり四位変格おのれい花オニ已下ヨリ出
るもよし但月花をヨハ自目ニ寄又他キ
者ニ寄る他キの月出枝キあるもあり風ら
枝ノ一季ニ百稿ニるも三キニ八自季詰あるも
みて千変万化ノ多し西花葉本ヒ葉ニ出ニ
西花 ア相のキ此法先ニおく自ノ多 相夷 相翌
○ 四ニねニるふ三ノ者の乃ノ自
コ ア彩原もキ者ノ相下枝れて 支考
ヒ一の橋も風ニ次ニ 型風
ゆりニ元ムをニる日乃光 的角
尺 某所の年加ヒ人ニつく 雲冷
△ヨ人所カ名ホトかて花の去 成也
ハ 丁ハ 塔ニ 特ニ乃山 水仮
[illegible] 注ヒの[illegible]ホ一位あり注去枝支考氏博ウ
ヒひわヒ弁ヒと表合あり我ニ語ニ百九表合ホ
の仇社ヒ易ヒの方花自自ヒかヒニ表の内ニ

一方ヒの姿ヒ定めて去程も法ニ用キ一きヲノヒヒ
一底面白ニ一ヒ者めニ一子の姿生所ニ垂て生ニ乃
ヲ乃ヒ又古来の法式ヲ二子の発明ヒ合ニるヨ
やヒ思て見ヲニ古法所伝ヒヨヒ法ニ及ヲ者
一巳の又和ヨあヒいヒ伝ヒむ巳一時の風俗ニさも
あノ一法式ヒヒむ所ヒ乃ノ一先所ヒ乃ノ古法ヒ破
ヒ式ヒ出ヒ乃ノ乃ノ制ヒ者きヲヒ弘めて自ノ
秀ヒ迷ヒ多ヒむヲヒ斗ヒ乃ヒ巳ヒ人ニ倍ノ人
ヒ乃ヒて乃ノ人もあヒむ拾ヒも古実ヒ弱ヒす安
ヨ彼ノ自ヒ乃ノ今二子のヒノ法ヒ定めむて
ニあヒニ可ヒ乃ヒ原て新て後人の宮あヒむヒ
原ノ定所の者ヒ乃ノ考ヒヒ

◆去来氏法ヒ者ニ之ヒ士二の去ヒヒ上木ヒノ八
士ヒ後安永七ニ丈百字ヒてあヒ内氏原
いヒヒ人の巳ヒ新ニて去来の系文ヒ定け
るあヒむ芭蕉淡ヒもヒるヲあヒヒ七記要心

弥七は法ひさう海の去来あるいは挙る延宝
己未のこれ冬日の表おを新さるゆもあく雖
ゆ松杉の表い自分ちゐ白あれ二て定階は兎て少
ゆ表るゆやに古法陶伝はようくいたいそれす又やゆや
実いこう人の捉あれい文文も去来の伝く我きく
去来い宮実の士雖は二ゆと英逸の中何そ
姫甘子の如人もて大乃を伝ふむ松三れ表れ乃
るい許ち支考の発句あ氏高の授記を伝ふると
接蘇法は叩ふ伝法を文さるれは蕉人の俳士宮
氏法格を捨てこすい無余のゆくちいこ人法を
脚ゆとゆふのこゆ氏ちさこれ表れの稽古する
時い人ち熟向句作の三法は力をひるゆ白句力仙
ゆもひゆられい逆てゆ人の捨はるゆむと忘
ちむ人いちは捨すくきるゆはあむ

海印深一終

ハ 拘荷乃中は雖も去ゆ 仲志
春三氏獣は雖の格句と新難遊て阿字の
言ふを写ふ時くとゆく文ゆて雖はゆゆ
さいて四季の余裏あゆい雖のれは歌名ふち
ちむ宮は捨するはれ句と孫とは記宮の二
格い氏用ゆゆむと深さく胸を法て口ゆと
ゆ伝れい何の字いおのつゆ二句の乃は結て
い注は飯れの雖ゆむと一度の底浮い宮りぬ
シ元 去ゆも写去ゆ表の山 遠ゆ
十七巳 ちるゆいれすむゆれは雖は 歴文
ハ裏い松芭も常の手を伝て 太雖
猫の花和尚ゆ尼の掃除と文て第と付さ
り去い松ハむは和尚ゆと伝ふを立てる作
こ氏もの伝きて去こは季の出るも出ぬも
何季を用るも法ゆ句ゆ物むる底を言
へ雖の去こは句の去底川を引て季とも

雅ともする去キを分くまゝ稗説伝奇
する人もあるまゝ漸め拾他社の変化自在を
宗とされい月毎の巨不事の仮宗あの泥
号毎篇物まして作者の不論いあれいつ
も押者のてきさゝとする人い皆ひつ云を寄る
奏ることゝ人〳〵部彼志ゆく〳〵——

海年録三終